

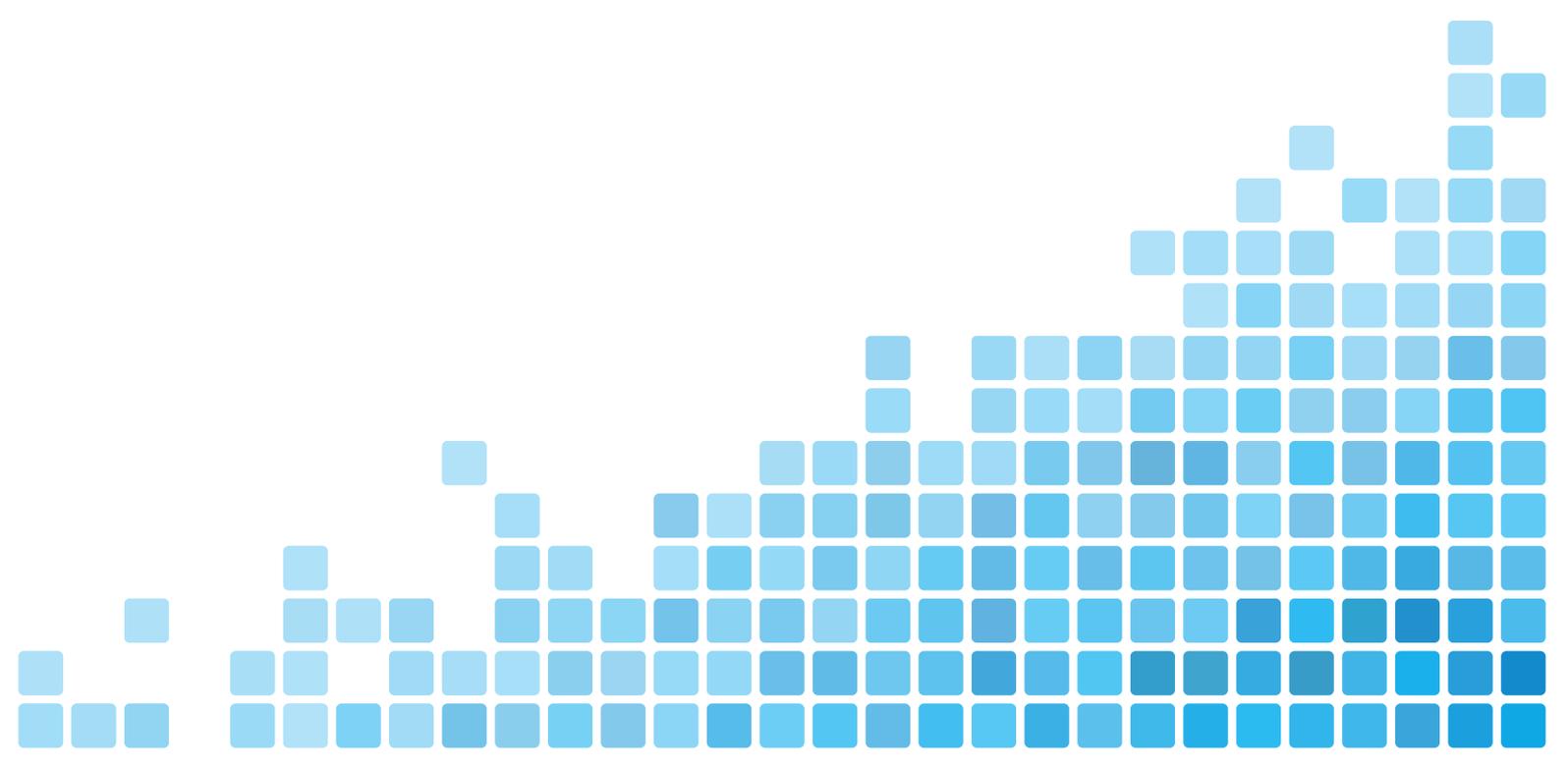
フェスタ
国立大学2016

ともに未来を考える
地域でつながる私たちにできること

平成28年度

大学改革 シンポジウム 報告書

島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター



開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

島根大学の服部でございます。

本日は、島根大学の「平成28年度大学改革シンポジウム」を、この雲南市の「教育フェスタ2016」、この場をお借りして開催できることになりました。速水市長を初め雲南市、雲南市の教育委員会の方々に、まず御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

また、この大学改革シンポジウムは、国立大学協会、全国の国立大学全てが加盟している協会でございますけれども、その国立大学協会との共催となっております。本日は、国立大学協会から山本専務理事にお越しいただいております。どうもありがとうございます。よろしく願いいたします。

さて、島根大学は、松江と出雲にキャンパスを持っておりまして、全部で学生6,000名ほどございます。地域にある、この島根の地にある大学、高等教育機関として、いかに地域に貢献していくか、それを深く今考えて追求しているところでございます。その一つが、地域貢献人材育成入試ということで、島根県と鳥取県に地域を限定しまして入試枠を設けております。これは、昨年の秋に実施いたしまして、今年4月に1期生が入学してきました。本日は、その地域貢献人材育成入試で入学してきました学生を初め30名ほどの島根大学の学生が、この大学改革シンポジウムに参加してございます。これからここでの討論を踏まえまして、雲南市の高校生の皆さんと、本学の



学生がともに地域課題に向けた検討を行うことになっております。島根大学としましては、学生をいかに地域に出し、この地域課題を理解し、またその解決方法を探るか。それをそれぞれの専門分野、各学生はそれぞれの学部、それぞれの専攻を持ってございます。その専攻を生かす、専門知識を生かして地域課題にいかに貢献していくか、これを大きな課題としてございます。本日は、そのような課題解決に向けての非常にいいチャンスかなと思っております。できれば学生が本日のこのシンポジウムに参加したことを機会に大きく成長していくことを祈っておりますし、また学生が参加することにより、雲南市の高校生にも何らかの刺激を与えられたらと考えてございます。

先ほど市長さんからの話で、この教育フェスタ、本年で25回と聞いております。島根県、地域課題、多くございます。その地域課題に率先して取り組まれた雲南市、特に教育というものを中心として考えられてこられたことが、この25回という回数にあらわれているものと考えております。島根県にある高等教育機関としての本学の役割を今後も十分果たすとともに、地域の皆さんとともに島根県の課題を解決していきたく考えてございます。

本日のシンポジウムが盛会に、そしてここに御参加いただいている皆さん方の少しでもよい知見になれば幸いです。大学改革シンポジウム、ちょっと雲南市に間借りして開催させていただきましても、非常に我々にとっては喜ばしい機会だと考えております。これを機会に、島根大学学生、教員、全てが、またこの地域のほうに出かけてきて、さまざま皆さんと交流しながら一緒に地域課題解決に向けていきたいと考えております。今後とも島根大学の教育・研究に御理解いただきまして、御支援賜れば幸いです。本日のシンポジウムが盛会になることを祈りまして、挨拶とかえさせていただきます。

平成28年度 大学改革シンポジウム

ともに未来を考える 地域でつながる私たちにできること

開催日 平成 28 年 10 月 16 日 (日)
会場 雲南市加茂文化ホール ラメール
主催 島根大学
共催 一般社団法人国立大学協会

目 次

■ 開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

■ 第 1 部

○高校生と大学生による地域活動体験発表 3

【発表者】

島根県立大東高等学校	2 年	福間 千紘、楠 胡桃、川本 晃子
島根県立飯南高等学校	3 年	村重 彩香、2 年 須藤 孝太、 2 年 武田 遼平、1 年 熊代 剛琉
島根大学教育学部	1 年	土江あやか
島根大学生物資源科学部	4 年	藤井 春菜

■ 第 2 部

○高校生と大学生のワークショップ 21

【ファシリテーター】

高須 佳奈 (島根大学地域未来戦略センター 講師)
中野 洋平 (島根大学地域未来戦略センター 講師)

【参加者】

島根大学学生
島根県及び鳥取県の高校生

※ワークショップ アンケート結果 26

○トークセッション 28

【ファシリテーター】

今村 久美 (認定特定非営利活動法人 カタリバ 代表理事)

【パネリスト】

小山 竜司 (神奈川大学 理事長付特別審議役、前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官)
岩本 悠 (島根大学地域教育魅力化センター 地域教育アドバイザー、島根県教育庁 教育魅力化特命官)

■ 第 3 部

○クローズセッション 39

■ 付 録

参加者数、アンケート結果ほか

第 1 部

高校生と大学生による地域活動体験発表

島根県立大東高等学校

福間 千紘（2年）、楠 胡桃（2年）、川本 晃子（2年）

島根県立飯南高等学校

村重 彩香（3年）、須藤 孝太（2年）、武田 遼平（2年）、
熊代 剛琉（1年）

島根大学 教育学部

土江あやか（1年）

島根大学 生物資源科学部

藤井 春菜（4年）



高校生と大学生による地域活動体験発表

地域課題研究 佐世地区防災

島根県立大東高等学校 2年3組
福間 千紘、楠 胡桃、川本 晃子

これから、大東高校地域課題研究、佐世地区の発表を始めます。私は、大東高校2年、福間千紘です。

同じく、川本晃子です。

同じく、楠胡桃です。よろしくお願ひします。(拍手)

私たちは、防災をテーマにした地域課題研究をしました。このテーマにした理由は、佐世地区に住んでおられる方の防災に対する意識が低いというアンケート結果を見たことと、自治会ごとに防災に対する意識が違うということを交流センターの安部さんから聞いたからです。

このテーマに対して、私たちは非常持ち出し袋リストの配布と、防災に関する講演会をすることで、住民の意識が高まるという仮説を立てました。この仮説を検証するために、私たちは二つの実践をし、アンケート調査によって検証をしました。

一つ目は、非常持ち出しリストの配布です。私たちが実際に市役所の安部さんからもらったパンフレットをもとにパソコンで作成し、7月31日、8月1日の常会のときに各自治会の班長さんにリストとアンケートを配布してもらい、アンケートは8月10日に行った講演会のときに持ってきてもらいました。集計は、8月19日にしました。

これが、実際に配った非常持ち出し袋のリストです。460世帯にこのリストを配りました。

大東高校 地域課題研究
佐世地区 防災

2年3組
福間千紘 楠胡桃 川本晃子

テーマ：防災

課題

- 佐世地区に住んでおられる方の防災意識が低い
- 自治会ごとで防災に対する意識が違う

仮説

- 非常持ち出し袋のリスト配布、防災に関する講演会をすることで住民の防災意識が高まる

検証① 非常持ち出し袋リスト

非常持ち出し袋リスト作成



7/31・8/1の常会時にアンケート共に配布



8/10の講演会時にもってきてもらう



8/19にアンケートの集計
約300人の方に協力してもらいました!!

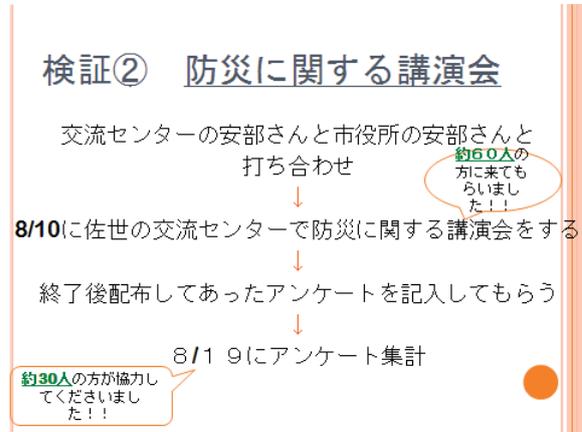
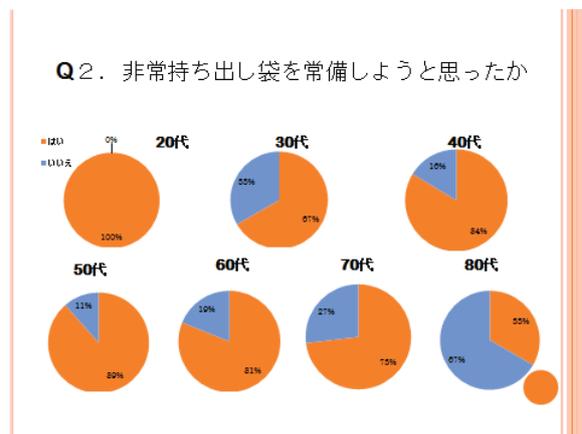
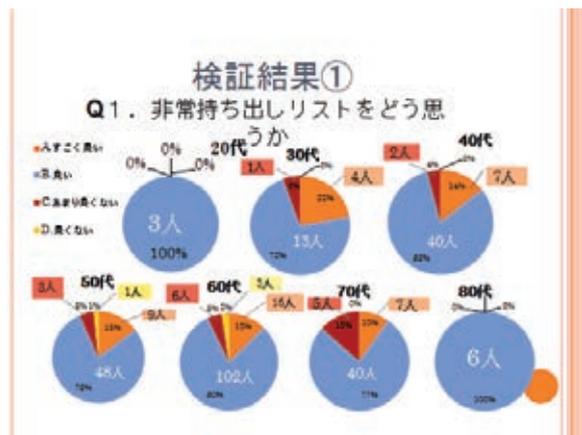


アンケート結果はこちらです。「非常持ち出しリストをどう思うか」という問いに対して、「すごく良い」、「良い」の割合が多かったです。しかし、「あまり良くない」、「良くない」と答えた人もいたため、もう少し工夫をすればよかったと思いました。特に、このような回答は50代、60代に見られたもので、もう少しグッズの使い方や説明を入れればよかったです。

また、「非常持ち出しリストを常備しようと思ったか」という問いに対して、もともと持っている人が「いいえ」と答えているのを含めているため、それを除けばほとんどの割合で「はい」と答えてもらうことができました。

二つ目は、防災に関する講演会です。佐世の交流センターの安部さんと、市役所の安部さんと打ち合わせをし、8月10日に佐世の交流センターで、講師の市役所の安部さんに来ていただき、行いました。

講演会では、私たちみずから司会進行を務め、風水害、避難場所や避難経路などの説明を行いました。講演会終了後、来てくださった皆様にアンケートに御協力してもらい、8月19日に集計をしました。これは講演会の様子です。約60の方が来てくださいました。こんなに来てくださるとは思ってもいなかったもので、驚きました。



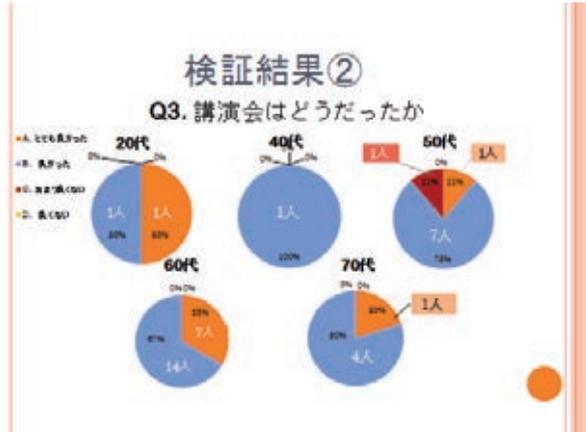
アンケート結果がこちらです。「講演会はどうだったか」という問いに対して、「とても良かった」、「良かった」と答えた人がほとんどの割合を占めており、講演会は成功したと思われました。

また、「土砂災害時の避難の仕方が分かったか」という問いに対しては、「はい」と答えた人がほとんどの割合を占めており、講演会で得るものがあったということがわかりました。

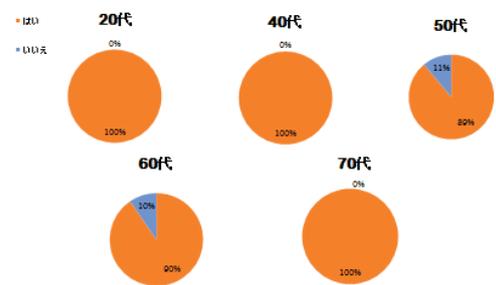
そして、「防災に対する意識が高まったか」という問いに対して、アンケートに答えてくださった皆様が「はい」と答えており、今回の講演会の目的は達成できたと言えます。

考察です。この研究から、地域の方にふだん忘れがちな防災に目を向けることを促すことができました。なので、講演会を行うと防災に対する意識が高まると考えられます。

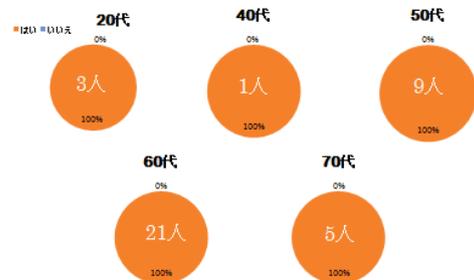
そして、この研究から見えてきた新たな課題は、若い世代が講演会にあまり来ないため、若い世代が来るような工夫をする必要があると思われました。例えば、SNSを利用して、各自治会の防災に関する取り組みを発信するなどしたらよいのではないかと思います。



Q4. 土砂災害時の避難の仕方が分かったか



Q5. 防災に対する意識が高まったか



考察

- この結果から講演会を行うことにより、地域の方に普段忘れがちな防災に目を向けることを促すことができたため防災に対する意識が高まると考えられる。
- この研究から見えてきた新たな課題は若い世代があまり来ないため若い世代の意識を高めるような工夫をする必要がある。
- SNSを利用して各自治会の防災に関する取り組みを発信し意識を高める。

この地域課題研究を振り返って、一つのことを達成するのに複数のことを同時にやらないといけないことの難しさや、限られた時間の中で企画し、運営することの大変さを知ることができました。企画しているときには、アンケートにあまり協力してくれなかったり、講演会で人が集まらなかったらどうしようという不安がありました。しかし、実際にやってみると多くの方に協力してもらえたり、たくさんの方が講演会に来てくださったりしたので、地域の方々の温かさを改めて感じることができました。本当にやってよかったです。

今回の地域課題研究を行う中で、交流センターの安部さんや市役所の安部さんをはじめとして、佐世地区のたくさんの方のおかげで検証することができました。それにより、私たちは地域の人に支えられていることを感じることができました。今後はこの体験をもとに卒業して社会に出たときや、日々の活動で活かしていきたいと思いました。

以上で、大東高校地域課題研究、佐世地区の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

研究を振り返って

- 企画して実践することは時間がなく準備が大変だった。
- 地域の人に支えられていることを改めて感じた。
- 今回の体験を卒業して社会に出た時や日々の生活で生かしていきたい。

森の学校サマーツアー2016

～町を変える高校生～

島根県立飯南高等学校

3年 村重 彩香、2年 須藤 孝太

2年 武田 遼平、1年 熊代 剛琉

皆さん、こんにちは。飯南高校です。僕たちは、一から企画をして「森の学校サマーツアー2016」というイベントを開催しました。

ちなみになんですが、僕は千葉県から、千葉県の中学校から飯南高校に入学しました。隣の彼は神奈川県、隣の彼は兵庫県から、全国それぞれ各地から飯南高校に入って学校生活を送っております。最後に、隣の彼女なんですが、実は何と出身がここ雲南市になります。笑ってくれてありがとうございます。すごい緊張してました。

これから詳しく「森の学校サマーツアー2016」について説明をしていきます。御清聴、よろしくお願ひします。（拍手）

こんにちは。僕は、昨年の春に飯南高校に入学しました。僕が飯南高校に入学して一番驚いたことは、ここ見てください。こっち2、3年生なんですけど、僕らの年、とても人数が少なかったんです。実際、数字で見ると、何と48人というとても少ない人数で学校生活がスタートしました。

そして、そこから数カ月間、飯南町で過ごして、一つわかったことがあったんです。とても田舎だということです。（笑声）ありがとうございます。田舎で何も無い、つまらない町だなと僕は思いました。僕は一つ不安に思ったことがあったんです。人数が少なくて田舎だと、ちょっと飯南高校やばいんじゃないかなと思ったんです。もし、高校がなくなったら、小・中学校が廃校になって高齢者だけの町となってしまいます。そうなると、飯南町自体が消滅してしまうんじゃないかなと思ひました。



入学時の全校



学年	1年		2年		3年		合計
	1組	2組	1組	2組	1組	2組	
男	16	15	26	19	26	8	110
女	8	9	16	18	13	23	87
合計	24	24	42	37	39	31	197
	48		79		70		

そんな中、町が5年ほど前から行っているサマーツアーというものがあつたんですけど、それに去年参加しました。これが去年の様子です。去年のツアーを通して、僕は飯南町のよさを発見しました。例えば、こういう自然がいっぱいあつたりとか、あとおもしろいおじさんがいっぱいいたりとか。さまざまないいところを発見しました。

そして、何とこのツアーで、ここにいる熊代君を初めとした中学3年生3人が入学してくれました。そして、僕はこのツアーを通して3人の中学生、3年生を入学させたことで、自分たちにも現状を変える力があることに気づきました。そして、現状を変えることができる力があることに気づいた僕たちは、町の職員が今まで行っていたサマーツアーの企画を、高校生の僕らに一から企画させてくれないかとお願ひしました。そこから僕たちの「森の学校サマーツアー2016」は始まりました。

高校がなくなる

↓

小中学校廃校 高齢者の町

↓

飯南町消滅！！

去年のツアー



人数が少ない+田舎

↓

飯南高校 大丈夫？



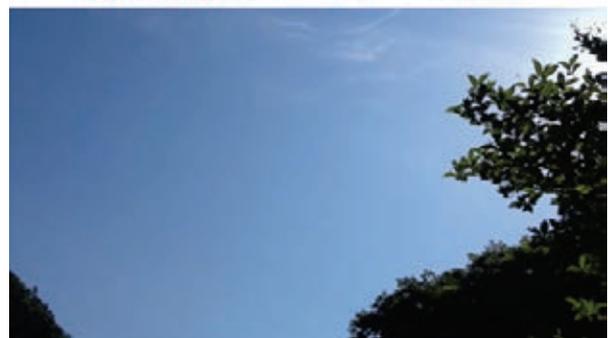
しかし、現実ではそう簡単にはいきませんでした。メンバーの気持ちが一つにまとまらずに、とても苦労した時期もありました。

さらに、部活動に所属しているメンバーも多く、会議に参加できないメンバーも出てきました。ちなみになんですけど、我が飯南高校にはサッカー部がありません。（笑声）ありがとうございます。しかも、テスト週間中は勉強を優先しなければいけないので、企画会議が開けないということが起きてきました。会議が開けなくてその企画が進まずに、いつかは本当にやばいと思った時期もありました。さらに、新しい企画を立ち上げてお願いをしに行っても断られてしまったりして、このままではサマーツアーが開催できないんじゃないかとかいう不安も出てきました。

しかし、みんなでそれを乗り越えてサマーツアーは無事に開催することができました。そんな苦労を乗り越えて、みんなで作り上げたサマーツアーがこれです。



森の学校サマーツアーの様子



実際どういうことやったのかを一部説明します。

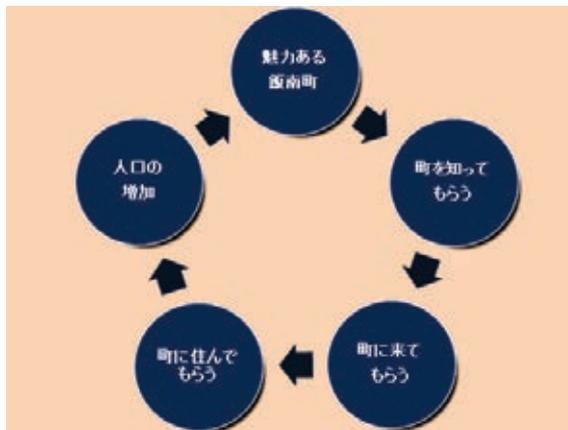
野菜収穫体験をしました。都会の子たちはなかなかできない体験だったので、とても楽しんでくれて、こんなに多くの野菜がとれました。この野菜は、夜にバーベキューをしました。バーベキューのことは後々説明します。飯南町には志津見ダムがあって、そのダムの見学をしに行きました。ダム湖で巡視体験をしました。これはとても、みんな喜んでくれて楽しかったです。夜にはバーベキューをしました。町長が来てくださり、地域の人たちと交流をしながらバーベキューをしました。この後には、地域の方々の家に行って民泊もさせてもらい、とてもいい経験になりました。

ただ、私が一番個人的に楽しかったのは、ピザづくり体験です。後ろのほうに、今動画で流れてるんですけど、石釜でピザを焼いて、なかなかできない体験だったので、とても楽しかったです。私はこの体験で一番元気がよかったです。(笑声)

こんなに楽しかったサマーツアーなんですが、このサマーツアーを通して僕たちが飯南町にどういった影響を与えていきたいかというのを説明していきたいと思います。

まずは、自然たっぷり、魅力たっぷり飯南町、それを、知ってもらおう。そして、サマーツアーに実際に来てもらおう。中学校3年生を高校に呼ぶイベントなので、3年だけでもいいから飯南高校に入学して住んでもらおう。すると、町の人口がふえる。さらに魅力のある飯南町ができる。その魅力の増した飯南町っていうのを来年のサマーツアーでさらに知ってもらって、来てもらって、どんどん飯南町の魅力、人口をふやしていく。そういう、サマーツアーを中心としたサイクルをつくりたいなと思っています。

最後になりますが、僕たちが今日のスライドを通して、一番伝えたいことを伝えたいです。それは、高校生でも社会を変えることができるということです。僕は、高校に入学した際、社会とのつながりなんて意識したこ



とがありませんでした。もし、かかわるとな
ったとしても就職してからだとか、もしくは
成人してからだとか、ずっと先の未来のこと
のように考えていました。

ただ、去年、そして今年のサマーツアーを
通して、社会と触れ合うことで自分と社会と
の距離を明確にすることで、自分でも、高校
生でも、僕でも社会を変えることができると
いう意識を持つことができるようになりました。
この意識をここにいる皆さんで共有する
ことができれば、必ずやよい社会がつけれる
と確信しています。ここにいる皆さんでより
よい社会、よりよい島根県をつくっていきま
しょう。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

高校生でも、
「社会」を変えられる！



COC人材育成コースから地域へ

島根大学 教育学部 1年 土江 あやか

島根大学教育学部1年の土江と申します。
よろしく申し上げます。

私のほうからは、COC人材育成コースの活動についてプレゼンテーションをさせていただきます。

まず初めに、COC人材育成コースとはどういうコースなのかということについて説明します。COC人材育成コースというのは、地域に貢献したい、地域で活かせる力をつけたい、将来山陰地域で働きたいという強い意志を持つ学生が集まるコースです。私自身も鳥取県の米子市の出身で、将来は鳥取県の米子市で教員として働きたいと思っている一人です。COC人材育成コースには、現在、総勢53名の学生が所属しており、私たちが1期生ということになっています。各学部にもコース生がいて、医学、教育、法文、総合理工、生物資源、各分野からそれぞれの学生が専門とする分野を地域に持ち寄って、どのようにその技術を生かしていくかということを考えてそれを実行していく、そういうことを目的としたコースです。

私がどうしてCOC人材育成コースに入ったのかということですが、私は地元である米子市がとっても大好きです。大好きな地元の魅力を伝えて、後世に残していきたいと思っているんですけども、地元の同級生、友達も、ほとんどの人が大学進学と一緒に憧れている都会のほうに出ていってしまいました。それで、鳥取県は人口が全国で一番少ないと言われているんですが、その現状はずっと打破することはできない、ずっと変えられない。じゃあ、どうやったら地元の魅力を誰かに伝えて、残していくことができるのか、どうすればいいのか。そのためのすべを学びたいというふうに思って、私はCOC人材育

COC人材育成コースから地域へ

島根大学教育学部1年 土江あやか

COC人材育成コースとは？

- ▶ 地域に貢献したい！
- ▶ 地域で活かせる力をつけたい！
- ▶ 将来、山陰地域で働きたい！
- ▶ **という強い意志を持つ学生が集まるコース！！**



なぜCOC人材育成コースに入ったのか

- ▶ 地元が大好き
- ▶ 地元の魅力を伝えたい、残したい

▶ **どうすればいい？**

- ▶ **そのための術を学びたい！**

成コースに入りました。

では、COC人材育成コースではどのような活動をしているのかということですが、ふだんからさまざまなセミナーを受けているのですが、その中でも、1泊2日で行われた大きなセミナーがあったので、そちらを紹介합니다。フレッシュマンセミナーというセミナーです。出ている写真は、掛合町の波多地区というところを、波多の職員の方と一緒にフィールドワークしているところです。ここでは、みんなで波多の地区を歩いて、波多の町並みを見て回り、どのような建物があるのかということをおもんなで一緒に学びました。同じフレッシュマンセミナーの中で、入間のほうにも行ったんですけども、入間の交流センターで田植え体験をしているところです。こちらもお入間の交流センターで、夜、バイオマス事業についての授業、講義を受けているところです。フレッシュマンセミナーでは、地域資源を見つけようというテーマのもとで、みんなで地域の取り組みについて学びました。事前指導として、地域自主組織などについても勉強してからこのセミナーには参加しました。

フレッシュマンセミナーが終わってもう半年ほどたつんですけども、今、このセミナーを思い返してみても私自身が変わったことというのを紹介します。私は、地域に貢献することの全体像が見えてきたということがありました。地域に貢献するといっても、どのように貢献したらいいのかというのは全くわからない。ただ、漠然と大好きな地元で貢献したい、そんなことがしてみたいという気持ちでいたんですけども。フレッシュマンセミナーに参加してみたら、雲南市の方々というのはものすごい行動力を持っていらっしゃるって、何か思いついたらすぐに発言して、すぐに動くという姿を見ていました。こういう行動力を持つことが、まさに地域に貢献することのスタートではないかと私は思いました。

どんなことをするの？

フレッシュマンセミナー



どんなことをするの？



どんなことをするの？



フレッシュマンセミナーを通して

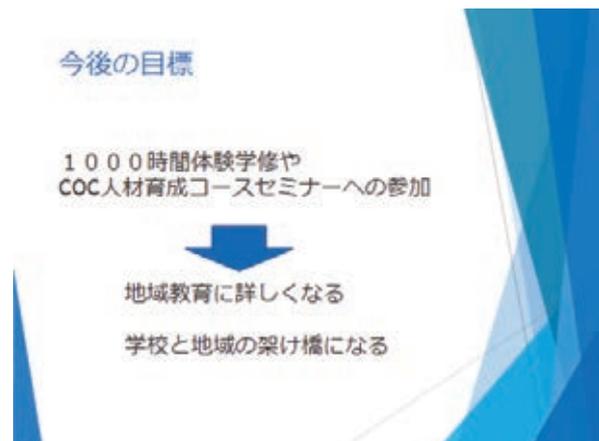
- ▶ 「地域に貢献する」ことの全体像が見えてきた
- ▶ 地域を見る視点

た。

また、地域を見る視点というふうに書いたんですが、先ほど写真で出しましたフィールドワークをしたという写真があったんですけども、波多のまちを見て歩いたという体験が、その後、米子市に帰った後にも、米子の町並みを自分の目で見てみたら、今までは見えてこなかったような、こんな歴史的な建造物があったんだということも見え始めて、これが地域を見る視点を養うということなのかというふうに思いました。

私の今後の目標ですが、教育学部のほうが独自に行っている1000時間体験学修への参加や、COC人材育成コースがこれからずっと開催していくセミナーへの積極的な参加によって、地域教育に詳しいそういう教員になりたい。また、学校の地域のかげ橋になれるような人になりたいというふうに思っています。これから3年半かけてCOC人材育成コース生として、また教育学部生として、こういう教師になっていきたい、また、地域に貢献していきたいというふうに思っています。

私のほうからは以上です。御清聴ありがとうございました。（拍手）



大学生生活を振り返って —地域での学びを中心に—

島根大学 生物資源科学部 4年 藤井 春菜

大学生生活を振り返ってということで、発表させていただきます。島根大学4年の藤井春菜です。よろしくお願いします。

まず、簡単に自己紹介をしたいと思います。私は、出身はここから車で約2時間離れたところの広島県尾道市因島というところです。瀬戸内海に浮かぶ島が出身で、はっさくゼリーや除虫菊、ポルノグラフィティの出身ということで有名なところです。私は大学で地域づくりにかかわりたいと思い、地域に出ているような活動に参加させていただきました。今日は、その地域での学びを踏まえて、大学でどんなことをやってきたのかについて振り返りながらお話しさせていただきたいと思います。

大学に入る前の話になるんですけど、高校3年生のときセンター試験の結果がちょっと悪くて、1月ぐらいまで進路に迷っていたんですが、そのときに会った三つのものが今の私をつくっていると考えています。その一つが、山崎亮さんという方が書かれた「コミュニティデザイン」という本です。この本の中に隠岐島の海士町の総合振興計画を住民みんなで考えて取り組んだという話があり、そこから島根県というフィールドにすごく魅力を感じるようになりました。

また、二つ目は「しげい帖」という冊子なんですが、これは自分が、何だろう、自分の思い入れのある地域を写真や言葉や動画などであらわして、周りの人に伝えていこうという取り組みの一環で、これが私の地元である因島の重井町というところが発端となって、全国に広がっています。というところから、私もこんなふうに地域づくりにかかわりたい、こんな身近にやっている人がいるんだから、私もできるんじゃないかなというところで、

大学生生活を振り返って —地域での学びを中心に—

島根大学 生物資源科学部 地域環境科学科
環境技術工学研究室 4年
藤井春菜



地域づくりにかかわりたいという思いが強くなりました。

そして、三つ目が、高校の遠足のときに行ったウサギの島こと大久野島というところ です。ここは、戦時中、毒ガスを生産していたところで、戦争が終わった後にその毒ガスを島の周りにまいたっていうところで、現在も人が住めない状況なんです。こんな身近に環境問題というのを感じて、じゃあ私に何ができるのか、どんなことを自分はしていかないといけないのかというのを考えると、環境についてもっと学びたいという思いが強くなりました。そしてこの島根県というフィールドで地域づくりにかかわりながら環境について学べるっていう、この欲張りな3つできるっていうところで、この島根大学生物資源科学部への入学を決意して、何とか合格することができました。

大学で、どんなことを学んできたのか。私は、最初、地域に貢献したいという漠然とした思いの中で活動とか勉強をしてきたんですが、例えば授業の中で中海や宍道湖の生態系について学ぶ授業がありました。そこでは、生態系とともに人々の生活や暮らしというものも密着しているよ、という話もあったんです。実際に宍道湖・中海に行ってシジミをとったり生物の調査をしたりして、実際どうなんだろうということを知ったり、また、授業外のところでも中海・宍道湖の付近に住んでいる方々にお話を伺ったりすることで、あ、本当に、人々の暮らしと密着しているんだなということがすごくわかりました。ほかにもいろんな授業があるんですけど、このような授業を通して、また、地域での活動を通して、水や土、生物、食料、エネルギーといった生活していくに欠かせない基盤、地域資源というものの重要性というのを痛感するようになりました。

また、地域資源の一つである木質バイオマス、これはいわゆる木をイメージしてもらえれば



いいんですけど、もっとその木質バイオマスを活用していこうよということで勉強している研究会にも所属しています。木質バイオマスは再生可能エネルギーの一つでもあり、燃料としても使えるのですが、これをボイラーとして導入することを考えたときに、どんなデータが要るかなっていうのを調査したり、また、講演会を開催したりというような活動もしてきました。ほかにちょっと話したいことはたくさんあるんですが、ちょっとここでは割愛しておきます。

そして現在、今、4回生ということで卒業研究に取り組んでいます。卒業研究では、地域資源の一つである水資源、この水処理にかかわる紫外線を利用した技術があるんですが、この紫外線ランプによる微生物の不活化効果、どのぐらい死ぬかなというのを検討する研究を現在行っています。また、私はもう2年大学院に進学して勉強する予定で、そこでは、バイオマス資源の活用について深めていきたいと考えております。そして、大学院修了後は、地域資源を活用した地域づくりに取り組んでいきたいと考えています。

最後に、高校生の皆さんに少しだけメッセージを送って終わりにしたいと思います。大学の4年間というのは、本当にあっという間で、私も気づいたら4回生の10月というところなんですけど、そこで、大事にしてもらいたいもの三つ紹介して終わりたいと思います。

一つは仲間です。島根大学は総合大学で、文系、理系の学生もいますし、また県外の学生が7割、8割を占めるということで、高校までとは違ったまた広いコミュニティーができると思います。そこで、ぜひいろんな仲間を見つけてください。

そして、そんな仲間と一緒にいろんなことに、大学生だからこそ、今だからこそできることに挑戦してほしいと思います。まず一歩踏み出すこと。私これがやりたいんだって、まず口に出すことから始めていくと、きっといろんな人が助けてくれると思います。そして、そこから得たこと、失敗することも成功



することもあると思いますが、そこから得たことをぜひ次に活かして行ってほしいと思います。

また、大学は学びの場でもあります。特に島根大学は、先生と学生の間がすごく近くて、いろんなことを聞いたり学んだりすることができます。さらに、地域に出て活動している学生や、授業でもフィールドワークできる授業も多くあり、そこで実際に活かしながら、体験しながら学んでいくことができます。ぜひ、このような環境を活かして充実して楽しい大学生活送ってもらいたいと思います。

皆さんの今後の活躍に期待して、発表を終わらせていただきたいと思います。御清聴ありがとうございました。



高校生と大学生の体験発表者へのインタビュー

○司会のほうから聞いてみたいと思います。

大東高校の生徒さん、佐世地区の課題があるということで、「非常持ち出し袋のリスト作る」「講演会をする」というアイデアのもとに、仮説を立てて検証するという形で取り組みを進められました。こういった手法についてですが、自分たちで仮説とか、検証とか、そういうことを考えたのでしょうか。

○福間

基本的に、仮説や検証は、自分たちで考えて企画してやりました。

○司会

やっていく中でいろいろ難しい点もあったというふうに発表の中でも聞いたんですが、もう一度聞いていいのでしょうか。どのあたりが一番難しかったですか。

○福間

やっぱり時間が、企画したりするのも時間がとっても短くて、交流センターの安部さんと打ち合わせしたりする時間も少なく、市役所の安部さんとの講演会の内容とかも決めたりする時間とかもあまりとれなくて、電話とかを使って何回も連絡してやったりすることが大変だったり。非常持ち出し袋のリストは一からパソコンで作って、なかなか上手にいかなかったりして、何かとても大変でした。

○司会

ありがとうございました。

一から自分たちで企画をして、仮説を立て、検証していくには苦労もあったということで、高校との勉強や部活動の合間を縫っての活動だったんですね。ありがとうございました。

では、飯南高校の生徒さんに質問してみたいと思います。

中学生の時に島根県外から飯南高校のこの

ツアーに参加して、今度は、自分たちがこのツアーを企画し、次の世代に体験してもらったという活動についての発表でしたね。この企画を通して、自分たちが一番よかったなと思ったこと、やりがいがあったなと思うことは何でしょうか。

○須藤

今年で、僕、2年生で、去年と今年のサマーツアーに参加したんですけども、去年のサマーツアーは、町の職員の方が企画をして県外の中学生を楽しませる企画だったんですが、今年は僕たち高校生が行く場所も決めて、行く場所のアポもとってお願いしに行って、企画も全部自分たちで考えて、自分たちで全部やるってということが一番やりがいを感じました。

○司会 ありがとうございます。

大人がするのではなく、高校生が自主的に企画立案、苦労もしたけど達成感もひとしお、ということですね。ありがとうございました。

それでは、土江さんはCOC人材育成コースの半年間がたって、今の思いを語ってくれたと思いますが、もう一つここで伝えておきたいこととか、言い残しておきたいことがあればお願いします。

○土江 フレッシュマンセミナーについて説明したんですけども、大学で受ける講義だけでは絶対にこのフレッシュマンセミナーでやったことってというのはわからない。実際に地域に出ていって見ないと、地域に貢献するってことの本質は見えてこないと思うので、こういう機会に参加なさってる高校生の皆さん、とってもいいと思います。地域に出ていくということ、どんどんしていきたくらいなと思いますし、私もこれからずっとやっていきたいなと思います。

○司会 ありがとうございます。

では、藤井さん、あと半年で大学4年間を終えようとしていて、次の未来も見据えているところだと思うんですが、今後、藤井さんはどんなふうに大学生活を送っていきたいと思っているのでしょうか。

○藤井 そうですね、これからもちろん勉強のほうもなんですけれど、今まで続けてきた活動であったり、まだやれてないこともたくさんあるので、実際に地域に出てたくさんまだまだ学んでいきたいと思います。

○司会 ありがとうございます。

それでは、高校生、大学生の代表者に、もう一度、皆様、盛大な拍手をお願いいたします。（拍手）

それでは、これで高校生、大学生による体験発表及びインタビューを終わります。



第 2 部

高校生と大学生のワークショップ

【ファシリテーター】

高須 佳奈（島根大学地域未来戦略センター 講師） A会場
中野 洋平（島根大学地域未来戦略センター 講師） B会場

【参加者】

島根大学学生
島根県及び鳥取県の高校生

トークセッション

【ファシリテーター】

今村 久美（認定特定非営利活動法人 カタリバ 代表理事）

【パネリスト】

小山 竜司（神奈川大学 理事長付特別審議役、
前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官）
岩本 悠（島根大学地域教育魅力化センター 地域教育アドバイザー、
島根県教育庁 教育魅力化特命官）

※「トークセッション」は雲南市が主催したプログラムで、本学が主催した「高校生と大学生のワークショップ」と同時に並行して実施されたものです。

高校生と大学生のワークショップ

(1) ワークショップの趣旨

高校生と大学生で構成する5～6人のグループに分かれ、与えられた地域の課題事例についてチームとして解決策を検討することを通して、地域社会の課題について考え、他者との対話を通じて、自分の未来（社会とつながって自分は今からどうなっていきたいか、また、そうなるためにどのような力をつけたいのか）について、考える機会としました。

(2) ファシリテーター

地域未来戦略センター 高須 佳奈 講師
地域未来戦略センター 中野 洋平 講師

(3) 参加者

高校生62名（島根県8校・鳥取県1校）
大学生29名（島根大学 1～4年生）
※合計91名が16のグループに分かれて活動しました。

(4) 会場

雲南市加茂保健福祉センター「かもてらす」
A会場；トレーニングルーム（1～8班）
B会場；大会議室（9～16班）

(5) ワークショップ（100分）の流れ

10：15～10：25 本日の活動について知る
10：25～10：45 各グループで自己紹介
10：45～10：50 課題（ミッション）を受け取る
10：50～11：20 課題解決策を検討する
11：20～11：35 課題解決策を発表する
11：35～11：45 自分の未来を考える
11：45～11：55 振り返り



10：15～10：25 本日の活動について知る



10：25～10：45 各グループで自己紹介



カードを使って自己アピールしました



10：45～10：50 課題（ミッション）を受け取る



各グループに提示された課題

「甲」「乙」「丙」「丁」の4種類の地域の課題(ミッション)が用意され、グループの代表が引き当てたいずれかを各グループに持ち帰り、何ができるのか、アイデアを出し合いました。



指示があるまで開けないでください

Mission

地域の行事に
若い人が参加しなくて
困った！

の解決策を考えてください。

指示があるまで開けないでください

Mission

車がないと買い物にも
病院にも行けなくて
困った！

の解決策を考えてください。

地域の行事に若い人が参加しなくて困った！

私たちの地域には、神社のお祭りや地区運動会、地区内の掃除など色々な行事があります。昔は子供から大人まで大勢の人が行事に参加して、親睦を深めたり、地域をより良い環境にしたりしていました。ですが最近若者が参加せず、行事の維持が難しくなっています。このままでは地域の活力が失われてしまうのではないかと心配しています。多くの若者に地域の行事に参加してもらうにはどうしたらよいのでしょうか。

雲南市民谷地区 ●●自治会 73歳 男性

© 2014 K.Tokuma&T Nakano CCSIkanawa Univ.

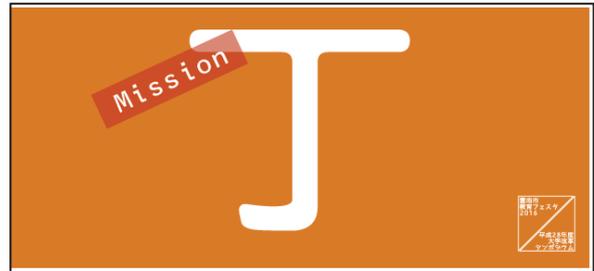
車がないと買い物にも病院にも行けなくて困った！

私の住んでいる地域にはスーパーや病院がないので、買い物や病気のときには車で離れたところまで通っています。今年の夏に足に怪我をしてしまい、車の運転ができなくなりましたが、幸い夫や息子が運転してくれるので、不便ですが何とか生活できています。

でも近所には一人暮らしで車を持っておられない高齢者がたくさんいます。そういう方々はどうしたらよいのでしょうか。

雲南市波多地区 △△自治会 64歳 女性

© 2014 K.Tokuma&T Nakano CCSIkanawa Univ.



指示があるまで開けないでください

Mission

空き家が
増えてきて困った！

の解決策を考えてください。

指示があるまで開けないでください

Mission

木次線の将来が
心配で困った！

の解決策を考えてください。

空き家が増えてきて困った！

私の家の隣は空き家です。ずっとおじいさんおばあさんが二人で住んでいましたが、去年、広島の子息さんと同居することになり引っ越しされました。それからは空き家のままです。近所をよくみると、空き家がたくさんあります。手入れがされていないのが、今にも崩れそうな家も。うちには小さな子供がいるので、危険な空き家が増えると心配です。空き家を減らすにはどうしたらよいでしょうか。

雲南市吉田地区 〇〇自治会 35歳 女性

© 2014 & Tokai&T Nippon CCL/Minami Univ.

木次線の将来が心配で困った！

雲南市を走るJR木次線は今年開通100周年を迎える、雲南市民にとっては大切な鉄道です。ですが最近、利用者が減り元気がありません。

同じ島根県のJR三江線は、利用者の減少から廃線が決まりました。このままでは、木次線も廃線になってしまうのではないかと心配です。木次線を盛り上げていくにはどうしたらよいでしょうか。

雲南市木次地区 〇〇自治会 42歳 男性

© 2014 & Tokai&T Nippon CCL/Minami Univ.

10:50~11:20 課題解決策を検討



11:20~11:35 課題解決策を発表



課題解決のために各グループから
出てきたアイデア

- SNSで地域の魅力を伝える。
- 地域の行事に若者が参加したくなるような楽しいイベントにする。
- 病院や店から、出張してもらう。
- 移動販売を増やす。乗り合わせを推進。
- 空き家を農家民宿にリフォームする。
- 環境の良さを活かした合宿所を建てる。
- 木次線の魅力を映画化して発信する。
- 木次線の車内で楽しいイベントをする。
- ここでしか買えない駅弁を開発する。

など

11:35~11:45 自分の未来を考える



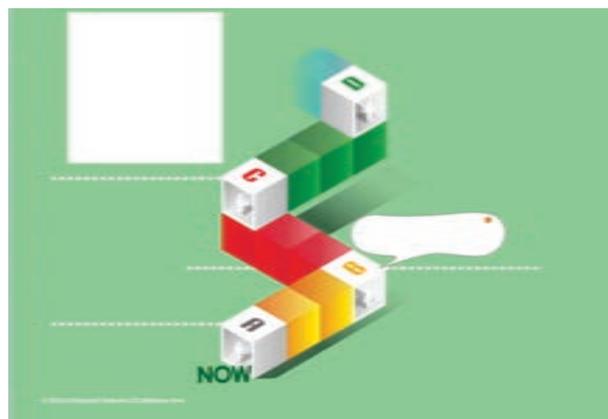
アイデアを実現するだけでなく、課題解決の成果を上げるには、実地調査等に基づく客観的なデータの集積や、持続可能性を見通したビジョンの構築、住民・自治体・行政等との調整など、多くの段階を越えていかねばなりません。実際に数多くの取組がなされていますが、最適解としてすぐ課題解決に結びつくというものでもありません。試行錯誤を繰り返し、常によりよいあり方を考えることが大切になってきます。

地域の課題に向き合うには、地域への思いをもつだけでなく、自分の生き方と地域社会とのつながりを考え、自身の力量を高めていくことが必要となります。高校生と大学生は、ワークショップの最後の活動として、

- ・自分はこれからどうなっていきたいか。
- ・なりたい自分になるために、これから自分が取り組んでいきたいことは何か。

の2点（自分自身の未来）について考え、

ワークシートに書きこんで、これからの行動につなげることにしました。



自分の未来を考えるワークシート

11:45~11:55 振り返り

ワークショップのまとめとして、参観していただいた参加者の方から感想をいただいた後、ワークショップに参加した高校生と大学生は、アンケートに回答することを通して、本日の自分自身の活動について振り返りを行いました。

（6）ワークショップの成果

ワークショップに参加した高校生と大学生91名のアンケート結果を、次のページに掲載します。

高校での地域課題にかかわる学びと島根大学の地域志向教育をつなぐことを意図した100分間の活動を体験した高校生と大学生は、自分の考えを初対面の相手に伝えることや、互いの意見を活かしながら協働で解を見つけていくことの難しさを感じるとともに、高校生は大学生が身に付けている力に、大学生は高校生の態度や力量に、互いに刺激を受ける場面があったようです。

ともに未来を考える高校生と大学生のワークショップは、自分自身の未来と地域の未来に向かって、具体的にどのような行動をとっていきたいのかについて、考える機会となったようです。

平成28年度大学改革シンポジウム ワークショップ アンケート結果

平成28年10月16日(日)実施

		参加者数	回答者数
A会場	高校生	31	31
	大学生	15	15
	計	46	46
B会場	高校生	31	31
	大学生	14	14
	計	45	45
高校生計		62	62
大学生計		29	29
総計(人)		91	91

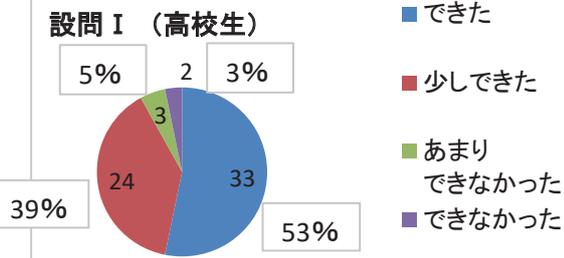
参加した高校生の出身高校

開星高校、島根県立飯南高校、
島根県立江津高校、島根県立大
東高校、島根県立松江東高校、
島根県立三刀屋高校、島根県立
横田高校、松徳学院高校、鳥取
県立鳥取中央育英高校
(五十音順)

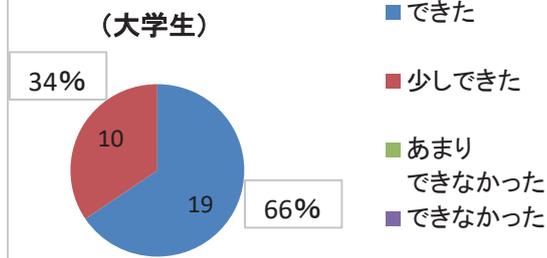
○ 設問Ⅰ. 今日の活動では、自分なりにアイデアを出したり、考えたりすることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	33	24	3	2
大学生	19	10	0	0
計	52	34	3	2

設問Ⅰ (高校生)



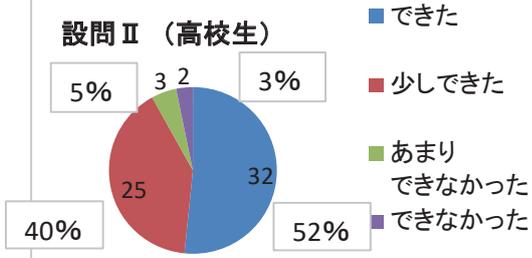
(大学生)



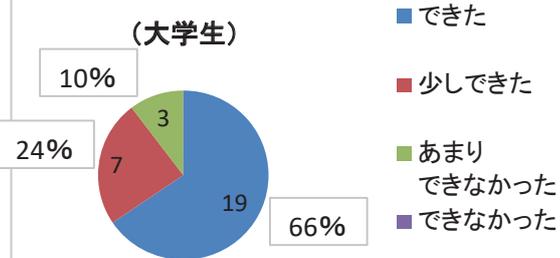
○ 設問Ⅱ. 今日の活動では、自分のアイデアや考えをチームのメンバーに伝えることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	32	25	3	2
大学生	19	7	3	0
計	51	32	6	2

設問Ⅱ (高校生)



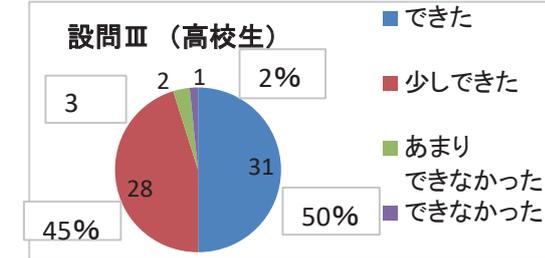
(大学生)



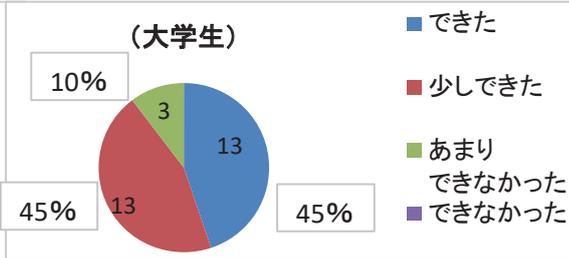
○ 設問Ⅲ. 今日の活動を通して、自分の未来を考えることができましたか。

	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった
高校生	31	28	2	1
大学生	13	13	3	0
計	44	41	5	1

設問Ⅲ (高校生)



(大学生)



()内の数字は内数

○設問Ⅳ. 今日の活動を通して、難しかったことがあれば、どのようなことだったか、書いてください。

- 高校生**
- ① 一つの課題に対して、様々な方向から解決方法を考えること。
グループのメンバーの意見を生かし、発展させること。(13)
 - ② 皆で出しあった意見は様々で、それらをまとめることが難しかったです。
またそれらを班の特徴・魅力と結びつけることの難しさも感じました。(10)
 - ③ 自分の意見をチームのメンバーにうまく伝えることが難しかった。(7)
 - ④ 初対面の人と話し合うというのはとても苦手で、大丈夫かなと思うところがありましたが、楽しかったです。また、身近にある課題を自分達で解決していくことは難しいと感じました。(4)
 - ⑤ これからの自分を考えることが難しかったです。(2)
 - ⑥ 特になかったです。楽しかった(2)
 - ⑦ すべて難しい。
 - ⑧ 話し合うこと。
 - ⑨ 自分とはちがう考えをどう広げていくか。
 - ⑩ 自分が置かれた状況と異なる状況で生活している人の立場を客観的に見ること。
 - ⑪ 地域課題の解決が、いいのがあっても、実現可能なものなのか、そこにも注目しないといけないのが大変だった。

- 大学生**
- ① メンバーの意見を尊重しつつ、どのように議論を広げるか。
それぞれの意見の共通点・つながりを見つけ新たな意見を創造すること。(7)
 - ② 年齢差や経験差のあるグループの中でワークショップということであり、沈黙が生まれることもあり、会話や議論の展開の難しさを感じた。(7)
 - ③ 高校生の考えや意見を聞き出すこと、引き出すことがまだまだ十分にできませんでした。
時間ももっと欲しいですし、実際の課題を当事者にヒアリングできるともっと良かったです。(4)
 - ④ 課題が木次線についてであり、実際に木次線を利用したことがなかったので少し難しかったです。(3)
 - ⑤ 自分の将来と、地域の課題を重ね合わせること。(2)
 - ⑥ 高校生と一緒に考えること、どこまで自分がしゃべっていいのか、導くこととの限度を見極めて考えることが難しかった。
 - ⑦ 年下で、初対面の人と喋るのは難しかったが、良い経験となりました。
 - ⑧ ワークショップのゴール、どこまで求めているのか分からなかった。
課題の現状について、地元の高中生もよく分かっていないようだった点。
 - ⑨ 特になく、楽しく有意義に活動させていただきました。

○設問Ⅴ. 今日の活動を通して、何か新たに得たことがあれば、書いてください。

- 高校生**
- ① 地域の課題について考えたことがなかったので、今回参加して、考える事が出来たし、他の人の意見も聞くことが出来て良かったし、楽しかったです。(28)
 - ② 自分が地域とかかわるなかでどんなふうになりたいかを考えることができ、まだわからないけど、ちゃんと見つけたいとおもった。(7)
 - ③ 自分の中のフワフワしていた理想が少しはっきりした。
 - ④ 自分の目指している職が地域とどうつながるのか考え、少しだけ答えがでた。
 - ⑤ 自分の地域についてより考えるようになった。
 - ⑥ 視野を広げていかないといけないと感じた。
 - ⑦ まだ夢がないので、早く見つけます。
 - ⑧ 自分でも課題を解決できることが分かった。
 - ⑨ 1つの課題について考えると、その課題を解決するための課題がいくつもでることがわかりました。
 - ⑩ 雲南市のことをいろんな人が考えてくれているんだということが分かり、うれしかったです。
 - ⑪ 積極的に関わること。大学生さんの進め方が勉強になりました。
 - ⑫ 大学生は問題の根本を見て解決しようとしていました。
この交流でもっと深い意見を出していけるようになったと思います。
 - ⑬ まとめ役がいるとスムーズに進む

- 大学生**
- ① 最近の高校生がしっかりとしていて、自分も負けてはいられないなと思いました。
また、自分には無いアイデアが聞けてとても良い時間を過ごすことができました。(5)
 - ② 高校生の意見がすごくしっかりしていて納得できるものであり、
こういった若い力を活かせる島根を作りあげていけるそんな人材に将来なりたいと思いました。(3)
 - ③ 自分の考えを積極的に伝えて、他人の意見とつなげること。(2)
 - ④ 地域に対する問題解決の新たな考え方。(2)
 - ⑤ たくさんのアイデアをまとめることの大変さを知った。どんなアイデアでも、
口にしたらみんながサポートしてくれて、よりよいアイデアにしてくれることを知った。
 - ⑥ 高校生の意見・発想は非常に柔軟であり、議論をする中で刺激を受けることができた。
 - ⑦ 地元を他県の人から見たら足りない部分が見つかるということ。
 - ⑧ 漠然としたものではなく、具体的な案がたくさんで具体性をもつことの大切さを学びました。
 - ⑨ 雲南市の現状について。
 - ⑩ 将来何になりたいかだけでなく、何になってどう社会に貢献していきたいかを考えることができた。
 - ⑪ 年齢等に関係なくスムーズに会議を進める方法がもう少しあったのかなと思った。
 - ⑫ 自分の性格。ファシリテーションの難しさと楽しさ。

トークセッション

ファシリテーター 今村 久美 氏
パネリスト 小山 竜司 氏
パネリスト 岩本 悠 氏

○今村氏 NPO法人カタリバの今村と申します。いつも温泉地区にあります教育センターであります「温泉キャンパス」の運営と、土日のお休みの日を使ったキャリア教育活動であります「幸雲南塾」のほうをカタリバのチームで担当させていただいております。

本日は、今からの時間、お二人のゲストと一緒に進めていければと思いますので、まずゲストの二人の方に登場していただきたいと思います。どうぞ。

今、おいでいただきましたのは、神奈川大学理事長付特別審議役、すごい役割を担っていらっしゃるんですが、小山さんは、神奈川大学から、今日はおいでになったんですよね。

○小山氏 ええ。おととしから神奈川大学に身を置かせてもらって、要すれば文部科学省の役人を平成元年に役所に入って25年、26年やらせてもらっています。

○今村氏 ありがとうございます。

そして、島根県教育庁教育魅力化特命官ということで、特命官ってまたすごいですが、岩本悠さんにも前に来ていただきます。

○岩本氏 私、東京出身なんですけども、10年前から島根県のほうでずっとお世話になってます。特に教育、10年前からは高校のほうで高校の魅力化ということで、隠岐島前のほうでさせていただいていました。今は、県の教育委員会のほうでそういった取り組みを支援していくような仕事をさせていただいています。今日は、どうぞよろしくをお願いします。

○今村氏 よろしくをお願いします。今からの、皆さんにこの時間をどう過ごしていた

だくのかというところなんですけれども、もしかしたらすごくご心配されてる方もいらっしゃるんじゃないかなと思うんですが、このお配りいただいているこちらの資料。資料の中のページを開くと、中に、11時から「熟議」と書いてありますね。そして、先生方には既にどこのお部屋にこの後行っていただくのかということのご案内もあるかと思うんですけれども。

ここから先生方には、また、ご参加いただいている親御さんの皆さん、そして地域の皆さんには、それぞれグループを組んでいただいて「熟議」をしていただきます。

「熟議」とは何でしょうか。何となく「熟議」と言われるものに参加したことがあるよという方、どれぐらいいらっしゃるのでしょうか。もしかしたら、昨年、教育フェスタに御参加の方は参加いただいたかと思うんですけれども、小山さん、「熟議」というのは、数年前に突然、教育業界に少しずつ入ってきたキーワードになってると思うんですけど。

○小山氏 そうですね。5、6年前だったですかね。

○今村氏 これはどういうものとして始まったんですって。

○小山氏 やっぱ、みんなで議論しようよっていうことに尽きるわけですが、それまでの上意下達っていうんですかね、文部省で方針を決めてだんだんお伝えする、県に伝え、県が市町村に伝え、学校現場に伝え、先生方に聞いてもらう。趣旨徹底講習会なんていう言い方を伝統的にしてたんですけど、方針は上で決めるもんだと。役所でも思い込んでいたかもしれない、先生方も思い込んでいたかもしれない、でも、そうじゃないんだよ、みんなで議論して決めていこうよっていう着想が、この「熟議」という言葉に込められてるんじゃないかなと思って、最近やってきましたよね。

○今村氏 文部科学省として、全国の先生方がもっと「熟議」をする風土をつくって

いこうよ、全国の地域の方々がもっと教育ってどうあるべきなのか、保護者の方々が学校とともにどういうふうに子どもたちを育てていくのかということをもっと話し合う風土をつくらうということで、数年前から文科省の方々が旗振り役になって、全国各地で始められたという理解でよろしいでしょうか。

○小山氏 そうですね。私なんか、おじさんたちはそういうのなかなか苦手だったりするんだけど、役所の中でも若手なんかは、このやり方に飛びついて自分たちも参加したり、いろんなとこに出向いて行ってファシリテートもしたりとか、いろんな活動をしてるみたいですね。

○今村氏 この教育フェスタでも、教育委員会が何を目標しているのかとか、雲南市がこれまでどんな教育を担ってきたのかということを知っていただくのではなくて、先生方にお話し合いをしていただくということで、この「熟議」を11時から開催することにいたしました。何をそもそも「熟議」するのということなんですけれど。

11時から、先生方には、簡単に言うとこれからの社会で子どもたちのどんな力を身につけていけばいいんだろうということが一つ目。二つ目は、それをどういうふうに育んでいこうかという、どんな先生方、親御さんの皆さん、地域の方々のどんな行動がその子どもたちを育む作戦になるだろうかということの二つを、この後、話し合いをしていただきます。これが11時からやる「熟議」の時間です。それでいきなり話し合ってくださいといってもなかなかお困りになると思いますので、きょうはお二人に、話し合いの土台になる、前提になるヒントをここで提示していただく時間を、このトークセッションの時間に設けたいと思います。そんなお願いをお二人にさせていただきました。

では、小山さんから、皆さん、先生方がお話しになる何かヒントになるようなお話

を、少し最初にいただこうと思います。では、よろしく願いいたします。

○小山氏 じゃ、最初に、ちょっとデータをご紹介させていただきます。これは、今、学校のカリキュラム、教育課程、それを今後どうやっていくかって文部科学省でも中央教育審議会とかで大議論になっていて、これからの時代どう変わっていくのか、教育はどう変えなきゃいけないのかっていうときに、枕言葉というか、必ず引用されるデータというか、話ですね。もう子どもたちの3分の2ぐらいは、大学出たころには今は存在してない職業につくはずだと、今考えてもどんな職業ができてかわからない。

それから、二つ目で、半分近い仕事は、今後たった10年から20年で、大半が自動化されてしまう可能性がある。だから、ビジネス雑誌なんか本屋でちょっと見ても、何かなくなる職業、生き残る職業みたいな特集も組まれたりしているけども、それぐらい不透明な時代に今差しかかっている中で、子どもたちに何を教えたらいいか、何を考えさせたらいいか。だから、最初のテーマでも自立とか行動とかいうキーワードはそこから出てくるんだと思うんですね。

あと、三つ目に、ジョン・メイナード・ケインズって、大経済学者のケインズで、ちょっと時代的にも古いですが、要するにこれ1930年でしたかね、その前の年に世界大恐慌があって、経済が世界的に落ち込んでどうするんだっていうときに、いやいや、みんなよく考えてみようと。今、苦しいけれども、例えば100年たったら、2030年どうなってるかっていったら、一つのケインズの想像として、仕事の時間は相当減っても大丈夫なんだ、だから大変じゃなくて、失業するとかそういう意味じゃなくて、いかにこれを豊かな生活に切りかえていくチャンスとして前向きに考えようじゃないかって、当時、1930年だったと思いますけど、

論文で言っていた話だそうですね。その予言が本当に今、実現しつつあるのかもしれませんが。

もう一つ、人口です。ここ雲南に来て、私なぞが言うまでもないことですが、19世紀末から22世紀まで、ドラえもんの時代まで帯をとってあって、人口減っていくんだと、減り方尋常じゃないんだと。22世紀の始めには、ほっといたら4,000万人台に落ち込みます。今、1億2,800何万とかいって、もうピークアウトはして、ちょっと減り出したって報道に出てたのもご存じかと思うんですけど、坂を転げ落ちるように人口が減っていく。安倍内閣でも、2060年ごろに8,674万人って予測を出してますけど、これを何とか1億人ぐらいで下げ止めるにはどうしたらいいか、少子化を止められるかどうか、大議論をしているという状況ですね。これは基礎的なデータとして、もう未曾有の人口減になって、おのずと社会は変わらざるを得ない。「地方消滅」とかいう本が出てショックを呼びましたけども、いや、地方消滅だけじゃない、東京だって消滅するかもしれない。消滅消滅って言っても始まらない。自分たちの地域をどうやってつくり上げていくか、残していくか、次代に伝えていくか、大人たちが考えなきゃいけない時代ですよというわけですね。私、文部科学省で仕事してましたし、内閣官房で安倍内閣の地方創生の仕事もさせていただいてたりしましたがけれども、要すれば、国でそういう緊急課題だ、職員集めて何するかといったら、地方の先進事例をできるだけ集めろという話になるわけです。来週の会議に、官邸の会議にかけるから、今日明日で集めろとか無茶な話言われて、だから地方に出て出歩いている時間なんか当時なかったんですけども、夜を日に継いで地方の先進事例、おもしろい取り組み事例を必死に探すということをやっていました。それぐらい、国で方針決めて流せば地方は生き残りを図れるなんてことはないことに皆が

気がついた。

それから、教育の場面でも、こういう世の中ですから、ずっと大人たちがやってきたような受験競争、カリキュラム、詰め込みや、いじめ・不登校対策、もう皆さんご努力いただいて今日があるのですが、これからの不透明さ、これだけ増えますんでどうしようと。今までと同じことを子どもたちに教えていたら、子どもたちが大人になって困るかもしれない。さあ、どうするってしたときに、もう国には答えは、申しわけありません、ないんだと。東京にいて、うんうん頭ひねっても、考えても出てこない。答えは地域ごとにカスタマイズされた形で皆さんが試行錯誤してもらうしかない、答えは一様ではない。

これぐらいと思いますけど、今日、島根大学とも共催ということなんで、大学のこともちょっと一言だけ言わせてもらおうと、先ほど来、学長もご挨拶され、「COC」っていう言葉ありましたね、学生さんの発表に。「センター・オブ・コミュニティ」っていう略語で、文科省が予算事業で造語してる話なんですけども、大学もそういう中でどうやって地域の役に立っていくか。全部が全部、国立大学だからといって東大、京大のまねをしていい時代ではとてもない。島根大学は島根大学のあり方で、地域に頼られる大学に変わってほしい。どんどん地域社会、地元と交流をしてほしい。そういう動きの中で積極的に取り組まれてるんで、この教育フェスタも大学改革シンポジウムと一緒になってる。皆で、大学のリソースも、大学生も入ってもらって、もちろん地元の高校生の立派な発表ありましたね。みんな考えていこうじゃないか、統一的な答えはないはずだ、さあ「熟議」してもらいたいという催しなんじゃないかなと思って、ちょっとこのデータをご紹介します。すみません、答えはないんだというのを、私は白状しに来たというのが正直なところですね。

○今村氏 ありがとうございます。

では、続きまして、この流れのまま岩本さんによるヒントを提示していただきたいと思います。

○岩本氏 岩本です。よろしくお願ひします。この後の「熟議」していくためのヒントということで、話をちょっとだけ紹介させていただきます。

先ほど小山さんのほうから、国の話や社会全体の人口の話ありました。次は、ちょっと地域の視点でというのを少し考えてみるとどうかというので、雲南市さんの中学校を卒業する生徒数のシミュレーションなんかを見てみても、次の15年で約4割減るということで、もう22世紀とかの話でなく、15年後には約6割ぐらいの子どもの数に、普通にいくとなっていくということを見たときに、やっぱりもう学校の形も教育のあり方なんかも、場合によったら変わっていきなさいいけない部分もあるかもしれない、そういう変化がもうすぐ差し迫っているというような現実があるということかなと思います。そうした現実をちゃんと直視しながらも、今、そしてこれからどうしていくのかということは、さまざまな地域で議論されているところです。

最近言われている地方創生というような言葉なんかもありますけども、本気でこの地域の20年後や30年後、40年後を考えたとき、どんな取り組みが必要になってくるのかというのを考えていくと、今はどちらかというともう本当に子どもの数、人の数が減っていく中で、何とか地方に、人に来てもらおう、もしくは仕事をとってこよう、何かの本社が来てくれたらいいとか、企業誘致しようとか、お金持ってこようとか、そういう何か中央から何かを持ってこようと、そういった流れなんかも当然ありますし、これはこれで非常に重要なことだと思います。東京の一極集中を何とか是正しな

がら、地方に元気をとということでやっていますが、恐らく、これだけでは長くは続かないということが、人口の推移なんかを見ても見えていると。そうしたときに、短期的にはこういった取り組みをしながらも、長期的に必要なになってくるのは、地方に何かを持ってこようという発想だけでなく、この地域でみずから次の地域をつかっていける、そういう人を育てていくということが非常に重要になってくるということころです。

雲南市は、短期的なところも当然やりながらも、市長さんの話でもありましたが、中長期的に絶対重要になってくる、必要になってくる、この人づくり、地域でみずから自立していけるような人、次の世代をしっかり育てていこうということにも市を挙げて取り組もうとされているところ、何か非常に先を行ってるなというような印象を受けているところ。

そのときに、地域で自立する子ども、若者たちを育てていこうというときの議論の一つの観点としては、やはり縦と横の連携というのがよく言われているかだと思います。縦として、幼保小中高と、雲南市さん、すごいなと思うのは、今回大学なんかも入れて、それでしっかり縦でつないでいこうと、こういう縦の連携ですね。そして、横、学校だけでなく、地域のさまざまな団体とか含めて、学校と地域協働して一緒にやっいていこうと、こういう発想で育てていこうということころです。

そのときに、縦でつないでいく、地域総がかりの教育というのを考えたときに、発達段階に応じて、ちょっとずつ教育の観点が変わっていく部分もある。よく言われていますが、「in」「about」「for」「with」（イン、アバウト、フォー、ウィズ）という段階ですね。例えば小学校の低学年なんかは「in」。地域の中でどっぷり浸る自然体験とか文化体験とか、もう五感にしみ入るような、理屈でなく、神楽の音だとか、

食育なんかもそうですね。そういう地域の文化、風土にどっぷり浸るような体験を学校、家庭、地域でしっかり子どもたちに体験させてあげるといような部分。次、

「about」。地域について調べる、考える、もしくは何か発表するとか、伝えていこうとする、そういう活動だとか、教育活動。小学校高学年とか中学校ぐらいになると、さらにそれに加えて、「for」。地域のために行動する、実践する、貢献する、そういう活動をやっていく。先ほどの高校生の話なんかもありました、地域のために動いた結果、少しでも何か変わる、その中で、あっ、自分たちで自分たちの地域や社会を少しでも変えていけるんじゃないか、そういう感覚を持っていく。そして、本当に変えようと思ったときには、もっと力が必要だ、もっと本当は自分が成長しないと変えていけない、貢献できないということに気がついて、そのための力をつけたいと思って、内発的な動機をもって、さらに学びに向かっていく、とこういう流れ。中学生、高校生のキャリア教育という、地域・社会とともにある自分の未来を、地域社会の未来とともに描いていく、そんな教育活動がさらに積み上がっていくといような、そういう発達段階の縦の流れというものを視点として持っていくというのが一つあるのかなど。

もう一つが、そうはいいいながら、本当にこれからどんな力を育てていく必要があるのか、どんな人材を育てる必要があるのかということ、やっぱり学校、そして地域総がかりで協議、「熟議」していくという視点だと思います。

これについて私、その10年前に隠岐の海士町のほうで、島前高校へかかわらせていただいていたんですけども、そのときなんかも、まさに教員と地域の方と一緒に議論をさせていただいてきました。そのときあった話をこの後の「熟議」の一つの参考にということとさせていただくと、当時、隠

岐で話していた子どもたちの課題という、主体性とか自立心とか、課題発見、解決していく、こういう力がやっぱりなかなか育っていないと。少子化になっているので、親や教員が全部先回りしてやってあげると、問題がありそうだったら問題解決してあげる、取り除いてあげると。そういうことを目が行き届くがあまりどんどんやっていると、子どもたちが自分たちで問題を何とか解決していこうとか、協力して何とかこれやっていこうとかっていう気持ちだとか力が育ちにくい、そういう状態があったと。学ぶことに対しての意欲も、言われるから素直にやるけども、みずから学んでいこう、学びをとりに行こうという力、意欲だとか、キャリア、自分の進路も、やっぱり親や教員が決めてあげるといことをやってくる中で、自分の進路や生き方を自分で考えていくといような意識だとか発想といものがなかなか育っていない。同じような人間環境の中でやってきてますから、多様な価値観、異なる価値観を持った人たちと一緒に協働していくような力だとか、そういう環境がなかなかないといことなんかを、当時すごい議論の中で問題視していました。また、地域側のニーズとしては、やっぱり後継者だとか地域の担い手が足りていない、不足してる。さまざまな課題がある中で、課題をみずから解決していけるような発想が必要だとか、既存の雇用、産業が衰退に向かっていってる中で、何とか産業を新しくつくっていく、そういうニーズなんか非常に大きい声として上がっていました。

その中で、これからはこの地域社会の本当につくり手を育てていきたいんだと。そのために必要な力として、当時、当然幾つも上がってきましたけども、一つとしては地域起業家的精神、これビジネスを起こすとか会社を起こすとい意味でなく、みずから事を起こしていくといような力や発想や意識、態度と、次のもう既に今来てるグローバルな時代に向かって、地域のこ

としかわからないとかできないだけでなく、地域に地に足をつけながらも、世界とつながっていきける、地球規模での発想を、広い視野を持ちながら、地域の課題解決に取り組んでいきける、こういう発想がこれから必要だというようなことが議論されました。そして今までは育った若者たちがみんな地域外に出ていったわけですが、仕事がないから地元には帰れないと言っていた若者、非常に多かったわけですが、今もそうですけども、これから育てたい、これから自分たちが育てていきたい子どもたちや若者の姿は、仕事がないから帰れないではなく、仕事をつくりたいと帰りたいんだと。この町にいろんな課題がある、それも学んで、知ってる、だからこそ、自分たちが帰ってきて、自分たちでそれを解決していきたい。仕事、雇用の場が少ない、わかっていると。だから自分たちが帰ってきて、そういう場を自分たちでつくっていききたいんだ。そういう気概を持った若者たちを育てていきたいというのが、「熟議」の中で生まれてきた共通の願いだったわけですね。そのためにさまざまな取り組みが、この先始まってやっていったんですけども。

その中で一つだけ、教員以外の地域の方たちなんかで、そんな中で自分たちは何ができるのか、そして子どもたちに意識の変化だとか、態度の変化を求めるだけじゃなくて、自分たちの意識や態度も変えていかなきゃいけないんじゃないかというような議論が、起きている。そのときに象徴的だったことを、一つだけ最後紹介すると、今までの自分たちのこの地元や地域やふるさとの対する考え方も変わっていかなきゃいけないんじゃないかという話です。今までは、ふるさととか地元っていうのは、志を果たして帰ってくるような場所だと。当時、102年前文部省がつくったあの唱歌「故郷」の3番は、「志を果たして、いつの日にか帰らん、ふるさと」へと歌われていたわけですが、この歌でいくと、志を果たす

のはどこかという都だったわけですね。都市、中央、東京、そういう場所で志を果たすんだと。終わったら帰ってくるような場所が、このふるさとだというような考え方で意欲や能力、志ある者を中央に集めた中央集権国家をつくっていったわけですが、これからはそれだけでは成り立たない。これからのこの21世紀の人口減少、そして地方創生とかのこの時代において大切なふるさと観は、志を果たして帰ってこれる場所。今まで、こういった志やチャレンジするということと、田舎やふるさとというのは結びついてこなかった。チャレンジするんだったら都へ行けと。おまえ、能力がある、チャレンジ精神旺盛、それだったら行ってこいと、みんな送り出してきたけど、それをもうこの発想として変えていこうと。まさに雲南市さんがいわれるチャレンジですね。それを当時、隠岐なんかも話をして、大人たちがやったのは、大体飲み会の最後に「故郷」を歌うと。僕ら、もう何百回も歌いましたけども、飲み会の最後、みんなで手つないだりとか肩組んだりとか、学校の卒業式の最後も「故郷」の歌、そのとき歌う「故郷」の3番は、「志を果たして、いつの日にか帰らん、ふるさと」へと、みんなで大合唱して歌っていく、そういう自分たちのマインドも変えていくし、そういう思いを、願いを子どもたちにも歌いつないでいきたいということで、地域の方たちとやっていくとか、そんなこともやっていましたということで、すみません、最後余談でしたけども、そんなことで、「熟議」を通して、本当にどういう地域や子どもたちを育てたいのか、そのために自分たちは何ができるのかというのを、これから考えていくということで、ぜひその輪の中にも入らせていただけたらと思っておりますので、よろしくお祈りします。

○今村氏 ありがとうございます。

もっともっとお話を伺っていきたくて

すが、「熟議」を始めるまでにあと20分しかないので、ここであと10分ほどちょっと私から、そしてお互いに聞いてみたいことを聞くという時間に充てたいんですけれども。

ちょっと、まず個人的なことを伺いたいんですけど、言ってみれば最先端の東京で、たしか岩本さんと私、同級生でして、東京出身のシティーボーイなわけですよ。東京出身のシティーボーイは、最先端の場所で、言ってみればいろんな機会を得ながら育ってきたと思うんですけど、何で今そもそもここにいるんですか。完全に。東京の大学生からいっても、就職人気ランキングほぼ1位、ソニーに入社されたはずという記憶が、私の最後の記憶なんですけど、何で今ここにいて、このような仕事されてるんでしょうか。

○岩本氏 そうですね、僕は、10年前、本当たまたまご縁があって隠岐の学校で出前授業をとということで、出前授業の講師みたいな形で呼んでいただいたのが、初めて人生において島根県に足を踏み入れた第一歩でした。そこから僕の人生は狂って、道を踏み外してしま……。

○今村氏 狂ったって言っちゃいましたね、今ね。狂ってないですね。

○岩本氏 ですけど、そこで痛切に感じたのは、あ、ここに未来があるな、日本の未来はここにあるなと思ったんですよ。当時から言われてました人口減少とか少子高齢化、財政難とか、日本の重要課題と言われて、当然ニュースだ何だで言われてるわけですけども、東京で働いて全くピンとこないわけですね、そういったことに。それが島根に来させていただいたときに、もうリアルに起きてると。日本全体の高齢化率の、本当に20年、30年、今40年近く先まで行っているということで、ここがもう未来の縮図であり、箱庭なんだと。ここがその課題の最先端であり、最前線なんだなとい

うようなことを感じて、そこに一番僕は魅力というか、可能性を感じて、本当にこういう課題とどうちゃんと向き合いながら幸せな地域社会や持続可能な地域社会つくっていくのか、もしくはその中で本当に教育が果たすべき役割って一体何なんだろうかと、教育からこういった次の時代に向けてやれることだとか、その可能性って何なんだろうかと。やっぱりそれを何かつくっていくような感覚があったというか、ここでそれをつくっていけば、それはこの地域や島根県のためだけでなく、きっとほかの多くの地域や、これ日本の未来の教育にもここから、この足元から貢献していけるっていう、そういう妄想があって、それで間違っちゃったみたいなの。

○今村氏 いやいや間違っ……正解に至りましたね、本当。言ってみれば、本当に一般的に言う、当時まだ地方に移住とかIターンとかっていう言葉もそんなに聞き覚えがなかったわけですよ。私にしてもNPOを立ち上げるなんて、ちょっと親からするとどこで間違っちゃったんだっていうようなことを言われてましたけど、岩本さんでいうと26のときに島根においでになったっていうことですけど、何となくそういう若者たちの、ないものを自分でつくっていくことが楽しそうっていう感じが何となく見えてきてるのも、逆にいろんな機会を与えられ続けてきた私たちの世代の特徴なのかもしれないなと思うんですけど、小山さんから見て、彼みたいなこと、どういうふうに見えてますか。

○小山氏 いや、不思議ですよ。はるか上のおじさん世代、もうバブルをよく知る世代からしてみたら、最近の若い人たちってどうしてこういう行動、おもしろいね、すごいねって思うんですよ。いや、失礼ながら、皆さんこうやって当たり前、今村さんの仕切りで、岩本さんのお話とか聞いてるけど、この二人、全国的にすごい二人

なんです。

○今村氏 いやいや、そんなことはないです。

○小山氏 いや、言っときますけど、言っときますけどって、私ね、だから地方創生の仕事してたんですね、安倍政権できてしばらくして。それで石破茂さんが大臣やられてたんで、仕事の一つで、とにかく石破大臣、現場で活躍してる、地方でフィールドを持って現に活躍してる若い人と話したい。自分はまだ国会で日程とられて東京をなかなか出られないもんだから、地元にも思うように帰れないから、できるだけ呼んでほしいみたいなことで、リストをざあっと作るわけですよ。その中に入ってたんですよ、今にして思うと。

私は、それで、電話したら、今村さんはたしかスケジュール全然合わなくて早々に諦めたの。岩本さんはたしか所在がつかまじませんかという状態になってて。

はい。つまり、石破大臣も直接話を聞こうとして、何とか手を尽くすようなお二人が、当たり前前に皆さん、こうやって雲南のここではいて、これから「熟議」に参加しようっていうのは、要するに、本当に最先端はここにあるっていうのは、キャッチフレーズじゃない、実際にそうだというのは、皆さん思ってもらいたいですね。

○今村氏 小山さんにしても、ちょっと年が上のおじさんっていう言葉おっしゃって、確かにそうかもなとちょっと思いながらお話ししてるんですけど、すみません。小山さんもたしか30代のときに初めて雲南市おいでになったんですかね。

○小山氏 30ちょっと前ぐらいですかね。

○今村氏 20代のときですよ。だから、岩本さんが26で島根入り、雲南デビューは29ぐらいなんですかね。

○小山氏 要するに、土江先生と出会いがあったからですね。

○今村氏 そのときに、逆になぜ東京の中心である中央教育審議会を取り仕切る文科

省にいらっしゃる立場ながら、雲南市に何を感じて、ここにおいでになったんですか。もしかしたら、そこには、ここにはあって東京にないものがあつたんじゃないか、それは私がここに引きつけられてる理由でも、岩本さんが引きつけられてる理由でもあると思うんですけど。

○小山氏 いや、ちょっと抽象的な物言いですけど、答えは東京にいても見つからないなと思っていて、答え探しに来たというような感じなんですよ。当時は、平成4、5年ごろ、総合学習をどうするんだ、何だそれっていう話で。

○今村氏 総合学習を、これからつくっていくぞっていうタイミングですね。

○小山氏 ええ。どうやってやるんだといったときに、地域巻き込んで、学校だけじゃなくてやっていかないと、学校教育だけじゃなくて社会教育とも連動していかないと話にならないよねっていう、問題意識だけあって。でもそしたら土江先生から、じゃ、ちょっと地元で議論しようかってことになり、わかりましたって来て、酒飲みながら議論始めて、実は昨晚も同じ調子でやらせていただいたんですけど、もう25年たつ。

○今村氏 実はそれが「教育フェスタ」のスタートだった。

○小山氏 そうです。「第1回教育フェスタ」です。

○今村氏 日本の総合学習のヒントは、雲南の教育フェスタからヒントを得た可能性もあるということですか。

○小山氏 いや、私がついていう意味じゃなくて、文部科学省の若手が入れかわり立ちかわり25年お邪魔して、ここで議論させてもらって、輪に加えてもらって、遠慮なく膝詰めで本音の議論させてもらって、その問題意識を持ち帰って仕事してるんで、路線が近づいてくるのは、もう理の当然だと思うんですけど。ここで見つけた答え、ここで聞いた問題意識を、引き続き東京に持つ

て帰って、私どもは仕事し続けている、そういう思いですね。

○今村氏 なるほど。ということは、この島根にしかり、特に雲南市には、既にある意味では最先端の日本のこれからをつくるヒントが、既にそこにあるかもしれないということが、お二人のお話からもわかりました。とはいっても、今、アクティブ・ラーニングといわれていますが、もう既にアクティブだよと思われてる方もいらっしゃると思いますし、何がどう変化していくのかということですが、先ほど小山さんがお話しになった、今既存の仕事は35%しか残らない、65%の子たちは、全然今はない仕事を担ってるだろうという、マイケル・オズボーンさん等が話しているような予測とかいろいろとあるわけなんですけど、それを学校はどういうふうにとめていけばいいのかということについて、「熟議」をこれから始めていただく上でどこから話せばいいですかね。

○小山氏 学習指導要領の変遷って昔から教育論争いろいろあって、学力低下問題とか、「ゆとり」とか、皆さん御記憶に新しいかもしれませんが、その前からも、戦後すぐ、体験重視か系統的知識が大事とか論争はあったんですね。1960年ごろ学力低下批判が、当時、経済界中心に起きたりして、カリキュラムの内容を増やしてみた、教育内容の現代化と。でも、なかなか学校現場で先生方に御努力いただいてもこなし切れないよ、落ちこぼれが問題になるよ、校内暴力やいじめを発生してきている時代状況もあって、昭和52年の議論から「ゆとり」という言葉が出ていたわけですね。

これは世間の印象とは大分違うかもしれませんが。負担を減らして、バランスを学校生活にもたらそう。そして何をしてきたか。平成元年の改定でも、社会の変化とか、心豊かとか強調して、1、2年生の生活科が始まった。道徳も強調されたけど、地域素材、地域教育とか盛んに言われ出しました

ね。学校5日制で土曜日何をする。総合学習も始まった、何をする。そして「ゆとり」批判もあって、学力低下があって、ちょっと総合学習の時間減らしたりとか、今、ちょっと苦しい編成が続いて、今も議論になってる。で、アクティブ・ラーニングだと。

一体、先生方にこれだけ頑張ってもらって、忙しい思いしてるのに、学校現場は大変になる一方で、役所は何かこう勝手にキャッチフレーズ、手をかえ品をかえ出してるけども、何だと思われてる先生もいらっしゃるかもしれない。いや、ぜひ考えていただきたいのは、根っこは皆同じでしょ。これから皆さんに議論してもらいたい、さっきのこの「熟議」のテーマで提示してもらったような、この地域なりの皆さんの学校ごとの答えを探してもらうしかないんだという1点に向いてるように、私は思うんですね。というよりも、この25年教育フェスタの議論に参加させてもらって、そういう確信が強くなってきています。

だから、別にヒントとか正解はもう全国的にはない、何度も申し上げるように。なので、それこそが未来のチャレンジで、チャンスなんだけども、じゃ、高齢化が進んで、人口も少ない中で日々の暮らし、どうやって維持する。仕事をつくるたって、なかなかね。だけど何が仕事になるかわからないので、地元にあるものを一生懸命探して、どういう地域をつくっていくかっていう、大人たちの議論をぜひしてほしい。そうすると、子どもたちに何を教えたいのかっていうのはおのずと見えてきて、それは多分一致してくるんじゃないかなというふうに思っています。

○今村氏 ありがとうございます。

では、ここから「熟議」を始めていただくんですけども、どのようにやるのかということ、ちょっとカタリバの生田から説明をしたいと思います。

○生田氏 失礼します。NPOカタリバの生田です。それでは、この後11時から行きます「熟議」に関してご説明をさせていただければと思っております。

「熟議」の約束として、ぜひ皆さんの活発な議論を行っていただければ思っております。ぜひ本日は、立場などを関係なくリラックスした状況で議論のほうを進めていただければと思っております。名称なども〇〇さんみたいな形で、日ごろ使わない、日ごろは〇〇先生みたいなことが多いかと思うんですけども、ぜひ〇〇さんみたいな形でリラックスした議論を行っていただければと思っております。

二つ目なんですけれども、やはり皆さん、それぞれの考えがあるかと思っております。ぜひ、その皆さんのそれぞれの考えを大事にさせていただければと思っております。違って当たり前かなと思っておりますので、そういった違いを受容するような議論の進めをしていただければと思っております。また、日ごろ考えないような発想を、本日は大歓迎したいなと思っております。生徒のことを考えながら議論をしていただくのもいいんですが、本日は日ごろのことをちょっと隅に置いて、本来あるべき姿を議論していただければと思っております。目指す状態としては、本当にオープンで自由な会話を、この後11時からの1時間で行っていただければと思っております。

本日の「熟議」のゴールなんですけども、この後、「熟議」、11時から12時で開催いたしますが、「熟議」が終わりまして、最後に閉会の会があるんですけども、そこでぜひ皆様の意見を共有する場を設けたいなと思っております。つきましては、「熟議」の会場に、それぞれのテーブルに白い画用紙とピンクの画用紙を用意しております。白い画用紙のほうに「育みたい力」を、記入していただければと思っております。また、ピンクの画用紙に関しましては、「その力を育むための具体的な行動」であ

ったり、「挑戦」のほうを書いていただければと思っております。

それでは、一度司会のほうにお戻しさせていただきます。

○今村氏

今、小山さんがお話しになっていたとおり、子どもたちにどんな力を育むのかということが、一番大切です。そこをビジョン、目の前の子どものための課題に頭を悩まされてることかと思うんですけど、一旦、その課題感をヒントにさせていただいて、ただ、そこに縛られずに、これからの社会、移り変わっていく中で、どんな力を育んでいくべきなのかということを書いていただくのと同時に、小山さんがお話しになったとおり、その力を育む大人たちがどんな変化をしていくべきなのか、どんな挑戦をしていくべきなのかということを書いていただくということをお願いいたします。

本日は、4、5人の、中学校区ごとにランダムに、小学校の先生、中学校の先生、それぞれ一緒のグループになっていただくことになるので、日常的には余りかわりがない方とお話しになると思います。同時に、外から今日おいでになっているゲストの方々とか、行政で働かれていますの方々が皆さんの「熟議」のサポートをします。ただ、サポートはファシリテーターという形でサポートするケースもあると思うんですけど、メモ程度をとられる形もあるかもしれないので、基本的には先生方、また保護者の方々、地域の方々、それぞれのグループで、もう雑談を、雑談ではないですね、「熟議」を楽しんでいただければと思います。

では、今から会場に移動いただければと思います。

11時～12時 「これからの時代を生きていく子どもたちがどんな力を育んでいくべきか」「そのために大人たちがどう変化していくべきか、どんな挑戦を大人たちはしていくべきか」をテーマに「熟議」が行われた。

第 3 部

クローズセッション

【ファシリテーター】

今村 久美 (認定特定非営利活動法人 カタリバ 代表理事)

小山 竜司 (神奈川大学 理事長付特別審議役、
前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官)

岩本 悠 (島根大学地域教育魅力化センター 地域教育アドバイザー、
島根県教育庁 教育魅力化特命官)



クローズセッション

ファシリテーター 今村 久美 氏

ファシリテーター 小山 竜司 氏

ファシリテーター 岩本 悠 氏

○今村氏 では、再び壇上に上がらせていただきました。今から12時35分までの間、この教育フェスタの最後の時間をここで皆さんと過ごしたいと思います。改めまして、進行を務めます今村です。そして、小山さんと岩本さんにも一緒に全体の進行をしていただきたいと思います。

ここでは、今からここまでの時間、それぞれの会場でそれぞれお話し、「熟議」をされてきたかと思しますので、まずその「熟議」でどんなお話をされたのかということについて、幾つかのグループから発表をしていただきたいなと思っております。ちなみに、地域の皆さん、そしてPTAの皆さん、学校の先生方には、各グループ、白い紙には、「これからの時代を生きていく子どもたちがどんな力を育てていくべきか」ということが白い紙、ピンクの紙には、「そのために大人たちがどう変化していくべきか、どんな挑戦を大人たちはしていくべきだろうか」ということをピンクの紙に書いていただいているということで、よろしいですね。

では、皆さんに発表をしていただこうと思うんです。せっかくなので、ここで話したことをシェアしていただけるよという方、手を挙げていただけますでしょうか。

5番グループが挙がりました。ありがとうございます。何事も1番は不安かと思いますが、5番グループ。5番グループ、お願いします。拍手でお願いします。（拍手）

○大東小学校の柘植と申します。よろしくをお願いします。

5グループで話し合ったこととして、これから必要な力として、情報リテラシー、

自己肯定感、協調性、対応力、忍耐、探求力、調整力、発信力、行動力、課題解決発見能力、たくさん出たんですけども、やはり一番最初に出ていますが、情報リテラシーということで、情報を収集したり、実際にそれを活用したりするっていうふうに、今、子どもたちは教員に聞かなくても、親に聞かなくても、家にあるタブレット、またはiPad、iPod、Wi-Fi機能を使えば、自分で何かを調べられる時代に入っていますので、人に聞くということもまず大切だけど、その情報を活用する、情報を調べるという力が、まず大前提になってくるのではないかなと思います。やはり年齢を重ねてご年配の方からすると、そういうタブレットとか、何ていうかこう、今までなかったものが入ってくることに對して抵抗を感じておられる方もいるかもしれないですけど、もうそういう時代に入ったということを前提にして、しっかり今、社会がこういうふうに向かっているんだよっていうことを受け入れて、積極的に、例えば学校現場であったら、都道府県でもやっておられるようにタブレットを導入したり、電子黒板などを積極的に活用したりして、教員にはちょっと大変かもしれないですけども、何が子どもたちにとって必要かっていうのを見きわめて、積極的に教員が勉強して、ICT活用、情報リテラシー等をしっかり勉強していくことが大切なんじゃないかなというふうに思いました。

ちょっとたくさんあり過ぎて、発表の時間がかかってしまいますので、ちょっと雲南市に特化した、これから私たちができることとして、地域の高齢者を巻き込んだ活動と、県外者を呼び込む活動、交流の場所、地域の世代を超えた交流ですが、まず一つの地域の高齢者を巻き込んだ活動で、私たち大東小学校は、祖父母会ということで、学校に高齢者の方に来ていただいて、実際にいろんなことをしていただいています。見通し、子どもたちが将来、地元で、都会

に出て戻ってきたときもそうですけども、高齢者になっても、年を重ねても、これだけ子どもに影響を与える場があるんだよ、これだけ発信できる場があるっていうふうに、年齢を重ねても自分の存在を証明できる場所があるんだなっていうことをわかる意味でも、この地域の高齢者を巻き込んだ活動っていうのは、非常に大切なんじゃないかなという話が出ました。

そして、県外者を呼び込む活動、交流の場で、先ほど飯南高校の発表を聞かせていただいて、非常に高校生の年代から県外の人と触れ合う、例えば方言であったり、自分たちが当たり前であったことがこんなにも違うんだっていうことを、高校生年代から感じられるっていうのは非常に大切なことだと思いますので、積極的に、その高校が取り組んでいらっしゃると思うんですけども、県外者を呼び込む活動、交流の場っていうのは大切になってくるんじゃないかなという話題が出ました。

最後の地域の世代を超えた交流で、これもちょっと大東小学校になってしまうんですけども、大東小学校で高齢者の方が来られて、子どもたちと楽しむ活動で演歌を歌われたんですけども、非常に楽しんで歌われたんですけど、その様子を見て子どもたちが何ひとつ、何ていうんですかね、ああ、演歌わかんないとか、何歌ってんだっていう雰囲気は一切なく、わあ、すごいな、僕たちのために歌ってくれてるんだとか、拍手を自然にできる環境っていうのは、やはり日ごろから高齢者を尊敬する気持ちだったり、年齢を重ねた人に何かを聞けば、知恵やありがたいことが聞けるんだなっていう環境が雲南市に根づいてるからこそ、こういう子どもの態度が出てくるんじゃないかなと思いました。地域の世代を、交流も超えた活動っていうのは、非常に大切なんじゃないかなというふうに思いましたので、そういう活動を学校側としても、行政としても増やしていくということが大切な

んじゃないかなという話を中心に出了ました。すみません、長くなりました。以上です。

(拍手)

○今村氏 ありがとうございます。

では、もう1グループ、お話を伺いたいと思います。今、とっても情熱的にお話をいただいて、本当にありがとうございました。手を挙げていただいているグループ、何グループでしょうか。

じゃ、そちらのグループ、お願いします。○21グループです。つきたい力は、社会や自分の周りとは積極的に力、いろいろな自分が考えたことなどを発信したり、それから、いろんな人に自分から話しかけたりするコミュニケーションの力をつけてほしいなと思います。それから、二つあって、もう一つは、自分を大切に自分で伸ばそうとする力、自己肯定感の低い子が多いので自己肯定感を高めていけるように、それから、自分の力、自分はどんな力を持っているんだっていうことを、いい面も悪い面もわかって、自己理解をして、そして伸ばしていこう、いろんな方法を使って伸ばしていこうとする力をつけてほしいなと思いました。そういうことを話し合いました。

そのためにということで、他者と協力しながら課題を見つけて解決していく学習を、教室や校外で繰り返し行っていく。大切なのは失敗を恐れない、失敗して、どこで失敗したかなと考えて、また繰り返す、失敗して繰り返すということの積み重ねが大切ではないかな、そういう場を私たちが提供していかなければいけないな、黒板に答えを書くときに、これで大丈夫って周りで聞いてから書くのではなくて、書いた答えが間違っている、それをみんなでまた学習し合っている、そういう環境をつくっていけるといいなということを話し合いました。以上です。失礼しました。(拍手)

○今村氏 ありがとうございます。

実は、同じこの会場に高校生の皆さんも、

そして大学生の皆さんもお座りいただいでるわけなんですけど、岩本さん、そちらの会場のほうにいらっしゃったみたいなんですけど、彼らはどんな時間の使い方をされたんでしょうか。

○岩本氏 高校生と大学生はグループになって、地域の課題の解決策をグループの中でいろいろ考えてるんですね、木次線の問題だとか、空き家だとかですね。その上で、じゃ、自分はこれからどういう自分になっていきたいのか、そして、そういう自分になるために、まさに私にできることだとか、これからやっていきたいことは何かというのを、最後少し考えて終わりました。ちょっともしよければ、高校生からも、いいですか。

○今村氏 せっかくなので、そうですね、高校生や大学生の皆さんにも聞いてみましょう。

○岩本氏 そしたら、高校生で、ちょっと最後結論だけでいいです、自分は将来、こういう自分になっていきたい、こういうことができる、こんなふうな自分になっていきたいな、そのためにこういうことをこれからやっていこうと思いますっていうような、何かさっきのグループワークの最後、少しやったと思いますけども、あそこら辺をかいつまんで紹介してくれる高校生、ちょっと手を挙げてもらっていいでしょうか。

○今村氏 手が挙がりましたね。

○岩本氏 おお、いいっすね。(拍手)

手を挙げただけで拍手をもらえる。すばらしい。

○今村氏 なかなかないですね、すばらしい。

○岩本氏 じゃ、30秒以内で、ちょっとお願いします。

○では、急いでいきます。三刀屋高校の中林です。

最後の何をしていきたいかなんですけど、僕の将来の夢はシステムエンジニアなんですけど、システムエンジニアって、まずニ

ーズがあって、そのニーズを受けて、自分が、僕が調べた中なんですけど、そのニーズがあって、そのニーズを自分で受けて、そのニーズをどう解決していくのか提案して、そのシステムとかを、こっちが提案して発注していくっていうスタイルなんですけど、そんな中で、もっと地域とかかわって、地域にどんなニーズがあるのかっていうのを積極的に求めていって、そのニーズを解決できるシステムっていうのをつくれるような、つくりたいなという夢は僕にあるので、そういうことを一番最後に感じました。以上です。(拍手)

○岩本氏 ありがとうございます。

ちなみに、その地域のニーズをちゃんと見きわめて、その解決策としてのシステムを構築していく、将来の自分になるために今からできることとか、やっていこう、意識していこうっていうことを、何かあえて一つ挙げるとしたら何ですかね。

○そうですね、地域の行事というか、地域のイベントに積極的に参加することによって、その地域で何をやってるかっていうことがわかって、逆に何をやっていないかっていうことが、そこでわかると思うので、そういうところをやっていこうかなと思います。(拍手)

○岩本氏 ありがとうございます。

○今村氏 先ほど、先生方の発表の一つ目のグループでも、ICTを使いながらいろいろなテクノロジーを駆使していく子どもたちを育てていくという視点を持つということが大切だという話がありましたけど、本当に地域と行き来をすることで課題を見つけしていくという力を育みながらも、最新のテクノロジーを駆使して、新しいソリューションを生み出せる人材になりたいっていう、本当に雲南ならではのシステムエンジニアの形なのかもしれないという希望がある話だなと感じました。

○岩本氏 いいですね、やっぱり現場にちゃんと足を運んで、自分で体験しながらっ

ていうところ、本当いい姿勢だなと思いました。

じゃ、あと大学生、さっき聞いたCOC人材育成コースの第1期生、ちょっと同じ質問です。自分は将来こういうふうになりたい、そのために大学時代、こういうことを頑張っていこうと思ったっていう、ちょっと紹介してくれる人。

○今村氏 女性の。

○岩本氏 はいはいはい、お願いします。

○今村氏 女性の学生さんから。(拍手)

○島根大学1回生の瀧川七海といいます。私は、今回のワークショップを通して思ったことは、高校生が当事者意識を持って地域にかかわっているなっていうことがすごく伝わってきました。だからこそ、私はこれから大学生としてやっていきたいことは、そういう高校生たちの一番の応援団でありたいなっていうふうに思っています。高校生と大学生、私本当に高校3年生と1歳しか変わらないので、年も近いので、そういった高校生が地域でこういう活動していきたいんだけどどうしたらいいかなっていう悩みだったりとかを一緒に考えていたりとか、もしくは大学で学んだ専門知識をそれこそ高校生の活動に生かしたりだとか、そういうことをしながらも、そういう高校生に雲南市のことをむしろ教えてもらうことも私はできると思っているので、そういうふうに高校生が一番の応援団になっていきたいなというふうに考えています。きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

○岩本氏 ありがとうございます。

島前高校の卒業生でしたね、今ね。

○今村氏 ちょっと自慢しましたね、今。

○岩本氏 ちょっとだけ、すみません。何かちょっとうれしくて。

○今村氏 立派でした、確かに。

○岩本氏 それで、もう一人だけいいですか。さっき学生ちょっと見てたら、教員志望できょうこの場に来てる人たちが何人か

いたと思うんで、教員志望の人の中でちょっと、自分はこういうふうな教育者になりたい、そのためにこれからこういうことを意識していこうと、やっぺいこうと、ちょっとそこら辺を、さっき大先輩の先生たちがいい発表してくれたので、それに続く島大の教員志望の学生さん、ちょっとお一人。

お、いいね、じゃ、ちょっとお願いします。(拍手)

○島根大学4年生の小林大輝と申します。この春から、広島県において正採用で先生をさせていただくことが今決まっていますので、それも見越して話をさせていただきたいなと思っています。(拍手)

○今村氏 広島にいい人材が。

○ありがとうございます。僕は、さっきのワークショップの中で、アンパンマンみたいな先生になりたいっていうふうに書かせていただきました。アンパンマンっていうイメージって、やっぱり勇気を与えたりとか、バイキンマンみたいなやつをやっぺたりっていうイメージがあるんですけど、僕の中でやっぱり夢を持って頑張るとか、その夢を描くために必要な材料を子どもたちに見せてあげる先生になりたいなと思っています。今すごく考えてるのは、やっぱり格好いい大人に出会うっていうことがすごい必要だと思ってる、これが目標を持って頑張ってることなんだとか、こんなふうになってみたいなっていうことを学校の中に持ち込んでいける、そういった先生になりたいなと考えています。以上です。ありがとうございました。(拍手)

○岩本氏 ありがとうございました。

ぜひ広島、嫌になったらいつでも島根に帰ってきてもらって大丈夫です。

○母ちゃんとけんかして広島に帰らないといけなくなったので。じゃ、ぜひチャンスがあれば、隙あらばという感じで帰ってきたいと考えています。

○岩本氏 そうですね。また広島でも島根で育ったことを、島根で学んだということ

を、ぜひ広げていただけたらと思います
で。

○はい、もちろんです。ありがとうございます
ます。

○岩本氏 ありがとうございます。

○今村氏 保護者の方から何か、議論をし
た内容でもいいですし、今のお話を聞いて
いて、こんなこと思った、あ、どうぞどう
ぞ。今、手が挙がりましたので。(拍手)

○これから生き抜く力とか、それに向けて
親がどういう姿勢を見せるかということ
を話してきたんですけども、生き抜く力を
発表せえと言われて、書いたことが生き抜
く力っていう、何ともちょっと大変なグル
ープなんですけど。要は、自分で物事をち
ゃんと考えられることであったり、考えた
ことを発信できる子どもであってほしいと
か、あと、すてきな笑顔を見せられると
か、ちゃんと自分の居場所を見つけられ
るとか、挑戦する力、そしてそれを突破
する力っていうのを、ひっくるめたら結
局こういう言葉になっちゃったっていう
のが、うちのグループの結論です。

そのために何をやるかということにつ
いては、例えば親自身がわくわくするこ
ととか、成功体験を子どもに経験させ
てあげなきゃいけないよねとか、古き
よきもの、昔の人の持ってた知恵とか、
地域の文化とか伝統とかっていうのを
継承していかなくちゃいけないとか、
そういうこともあったり、あと人と
のつながりをつくる機会をつくって
いってあげなきゃいけないことがあ
ったんですけど、結局、親がそれを本
当に今ちゃんとしてるのっていう、自
分のこと振り返ってみると、結局自分
自身が大丈夫なのかなっていうところ
があって、親の背中も見せなくちゃ
いけないんだけど、結局、家庭の中
に、自分も一緒に体験したり、経験し
たり、楽しんだりっていうことをし
ていきたいと思いますっていうことがあ
って、地域の行事だとか学校行事だ
とかっていうところに、親も一生懸命
やってる姿を子どもと一

緒にやりながら見せるということをして
いかなきゃいけない。その過程の中に
絶対必要なのは「直会」(なおり)だ
なということ、うちのグループは落ち
ついて、まず、行事の「直会」を大切
にしながら、子どもとの接点を増やし
ながら、地域の中で子どもを育てま
しょうという、そういう感じになりま
した。(拍手)

「ノーナオライ・ノーライフ」って
いうことで。

○今村氏 「直会」って、外から来た
方々がわからないと思うので、ちょ
っと解説をしていただいてもいいで
すか。

○「直会」っていうのは、もうすぐ
神在月ですけども、「神様が出雲に
集まって、いろんなはかりごとをし
て帰られるときにやった宴会」の
ことを「直会」と言い始めたよう
ですけども。

○今村氏 語り合うことが大切だ
ということですね。

○はい。結局は酒飲んで、ていう
感じですよ。

○今村氏 語り合うということ
ですね。「熟議」が大切だということ
ですね。ありがとうございました。酒
って、酒です、やっぱりね。でも
ちょっとこれ教育の場なので、ちょ
っとあれかもしれないですけど。

ということで、楽しい時間もあと
数分になってまいりました。小山
さん、ここまでの、総括といいま
すか、ここまでのお話を聞いてい
て、コメントをお願いいたします。

○小山氏 昨日も入間の交流セン
ターでとこの議論に参加させてい
ただいて、今日、この午前中、皆
さんのご議論の様子を、あの後
ぐるっと見させていただいた後、
ちょっと外の空気吸いに出てみ
たら、すてきな親子連れに会
って、この話聞いていただい
たようですけども、これからの
国の方向とか、地域で自分たち
で考えると、何を豊かって考え
ますかねなんて話をしたら、ち
っちゃな女の子が、1、2歳
ですかね、お父さん、お母さん
と私が立ち話したら、ととと
って寄ってきて、これくれて、

おじちゃん、はいって、松ぼっくりかな、だめですね、そういうのもとつきにわからないおじさんは全然役に立たないけど、ああ何かいいね、ありがとうって言ったら、あっちにあるよとか言ってくれて。だから、この子たちがきょうは雲南で、日本中のいろんな地域で、これから教育を受けて巣立っていく世の中ってどうしていくか、その地域社会を大人たちはどう守り、つくっていくか、っていうのを、やっぱり地域ごとの議論だし、例えば、今、雲南でとっても豊かな環境ですくすく育っているお子さんたちを、さあ、これから世の中でどう迎えるか、っていう、何かとっても大切なものをいただいたんでうれしくなって、きょう、今、皆さんのご議論に出てたような話こそが肝だと思えますし、オープニングでも話出てたように、それこそが最先端であって、考えていくべき、追い求めるべきフロンティアはここにしかないのですから、皆さんの日常のお悩みを、大人も子どもも議論し合うということが、今後も大事なんだろうなと思って、ちょっとご紹介させていただきました。今日は、本当にいいお話をいろいろ聞かせていただいて、ありがとうございます。

○今村氏 岩本さんもコメントお願いします。

○岩本氏 そしたら、僕、二つあるんですが、一つは、先ほどの情報リテラシーの話なんかもそうですし、「直会」もそうですけど、こういう場でいろいろやると、やっぱりこれが大事だ、もっとこういうことをやっといこうってたくさん出てきて、本当に大事なことでやっといっていくべきだと思うんですけど、そのときに大切なことをどんどん積み上げてくと、今でさえ大変で、学校も多忙で、先生たちすごい一生懸命やっっている中で、もっともっとというやっぱり大変になってくる、その中でやっぱりこれからもう一つの視点として考えていったらいいかもしれないなと思ったのが、今、

学校でされてることなんかも、やっぱり仕分けしていくというか、本当に学校の教員だけで絶対にやるべきことは何なのか、逆に地域と一緒にやったほうが、もうちょっと効果的にできることって何かとか、あとは、これ、地域がやったほうがいいこととか、家庭でやればいいしみたいな、地域側でもっとやっといっていくべきこととか、もうちょっと再編していくというか、業務をですね。やっぱりそこで生み出したゆとりを、ちゃんと「直会」の時間に使うとか、これからICTのやっぱり導入してやっといこうという中で、そういう時間に使うとか、ちょっとそういう、やらないということよりは一緒にやっといっていくとか、誰かほかと連携しながらやっといっていくとか、それを任せていくとか、組みかえていくとか、ちょっとそういう作業もあわせてしていかないと、していかないとというか、したほうが多分気持ちよく前に、その時代の変化とか、社会の変化とかに向かって動き出せるような学校組織になっていく、もしくは学校と地域の関係になっていくのかなと思ったというのが一つ目です。

二つ目は、高校生と大学生のほうで、あの話聞いてて、僕本当、さっきの発表なんかもすごいなと思って聞いてました。ただ、一方で、自分はこれからこういうふうになっていきたいとか、これやっといきたいっていうのが書けなかったような高校生もいたと思います。僕はそれ全く心配する必要がないというか、書けなくて当然だと思っでもいいし、書けない自分がよくない自分で、自分は全然キャリアが見えてなくてとか、これからの夢がないからだめなんだと、そんなこと思う必要性は一切ないと思ってます。これから別に夢とかなんとも見えなくたって、今、目の前にあることに誠実に向き合っって、それをちゃんと乗り越えていくとか、課題見つけて解決していく先に、また未来は開かれていくし、逆に書いた人も、ちゃんと自分はこうなりたいとか、こ

ういう未来の自分の職業につきたいんだと
かって書いた人も、それにあんまり固執す
る必要は、全くないと思ってます。これだ
け、先ほどの話も、いなかったとき話した
んだけど、職業とかどんどん変わっていく、
時代が変化していく中で、自分の夢とかや
りたいことも変化して当然です。今の自分
がそう思ってるだけで、今の自分がもっと
成長すれば、夢だってやりたいことだって
変化、成長して当たり前ですので、そうい
う意味では、変化することを恐れることな
かれと、そういう時代です。変化を楽しみ
ながら柔軟に自分を、変化を楽しみなが
ら向かっていくというような、何かそうい
うしなやかな生き方もあるんだということ
を頭の片隅に置いてもらえるといいかな
というふうに思いました。以上です。

○今村氏 あれですかね、今正解とされて
るものを、もしかしたら大人も一回手放す
必要があるのかもしれないですね。本当に
劇的にこれから日本の教育が変わる準備を
文科省さんはされています。相当変わると
いうことを一応文科省さん的にはうたっ
ている中で、もしかしたらどう変わるのかと
いうと、今ここでこのように地域の中で
どう子どもたちを育てていくんだろうとか、
徹底的な暗記をさせるのではなくて、そのむ
しろ一つ覚えた年号の裏側にあった背景を
もっと理解することが、雲南の今を理解す
ることと実はつながっているということか
もしれないとか、そういうことを考える教
育に日本がどんどん変わっていくかもしれ
ない。それはもしかしたら、この雲南市
の中で悪戦苦闘されながら、「夢プロ」と
かいろいろなものを実践されてる先生方
の一つ一つのご努力が、今の卒業生たちの
発信にもつながっているということ、日本
が学び、そういう新しい変化を向かえよ
うとしているぐらいの捉え方をさせていただ
いて、ここからの変化を一緒に楽しんでい
けると、大人自身がですね、いいのかなん
てことを思いました。

教育フェスタもこの時間で、これをもっ
て終了です。まずは、おいでいただきました
お二人に大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

今日、一緒に「熟議」をされた、そして、
大学生、高校生一緒に議論をされたお互い
に拍手をお願いいたします。(拍手)

ということで、変化を楽しめる雲南市、
そして島根県をこの場所からつくっていく
ということで、きょうはこの場を閉じたい
と思います。どうもありがとうございました。
(拍手)

○(司会) 会場の皆様、熱心なご討議あ
りがとうございました。

そして、小山様、今村様、岩本様、改め
てお礼申し上げます。会場の皆様、今一度
大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

本日は、包括的に連携する雲南市と島根
大学が、連携、協力して地域づくり、人づ
くりを進める機会として、「雲南市教育フ
ェスタ2016」「平成28年度大学改革シン
ポジウム」を共同で開催いたしました。

島根県は、さまざまな地域課題を持つと
いう意味では最先端の地域であり、だから
こそ学びの場も多く、豊かで多様な学びを
授けてくれる地域であるとも言えます。こ
の地域でつながる縁を持った本日の参加者
一人一人が、これからも私たちの現在と未
来に向き合い、ともに考え、ともに課題を
解決し、この地域から持続的に発信するこ
とができるようにつながりを持って行動し
ていけることを願っています。

以上をもちまして、「雲南市教育フェス
タ2016」並びに「平成28年度大学改革シ
ンポジウム」を閉幕させていただきます。

本日は多数のご来場、まことにありがと
うございました。

付 録

○参加者数

○事後アンケート結果

※高校生・大学生の回答結果（「高校生と大学生のワークショップ」について）は、第2部に掲載）

○シンポジウムポスター

○当日配付パンフレット

○新聞掲載記事

○ご協力いただいた方



平成28年度大学改革シンポジウム 参加者数

(島根大学集計分)

区分		人数
国立大学協会		2
文部科学省		2
		55
島根大学	教職員	26
	大学生	29
		71
高校	教員	9
	高校生	62
報道関係		4
計		134

(雲南市集計分)

区分		人数
雲南市教職員		229
雲南市PTA/地域関係者		58
		50
雲南市外	文部科学省	6
	島根県教育委員会	9
	その他	35
		63
雲南市内	行政	15
	スタッフ	38
	カタリバ	10
計		400

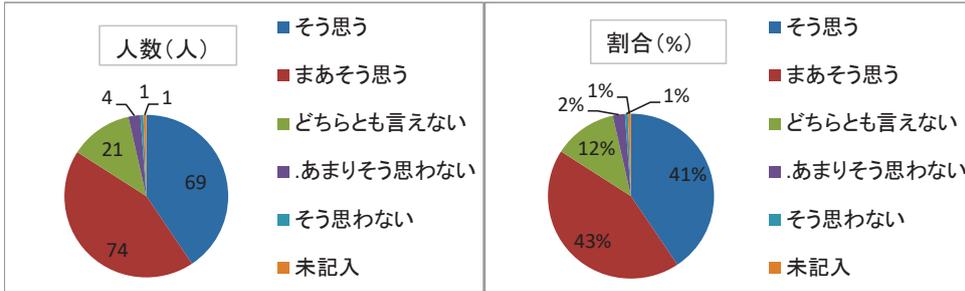
合計 534名

設問1. このイベントを通して、どのようにお感じになられたか、あてはまる番号に○をつけてください。

① 地域を学びの場として次世代の人材を育成することができると思う。

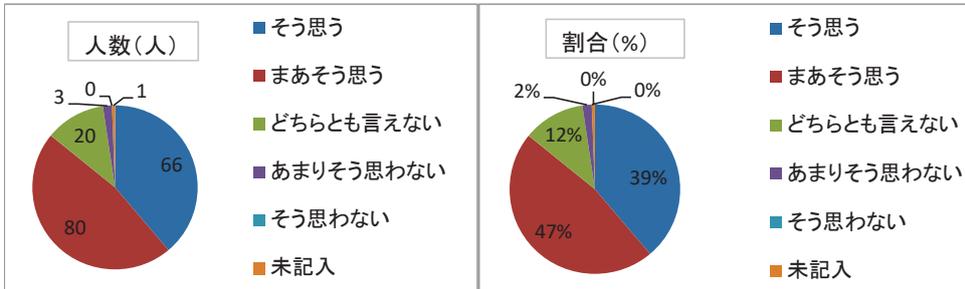
回答	人数
そう思う	69
まあそう思う	74
どちらとも言えない	21
あまりそう思わない	4
そう思わない	1
未記入	1
総計	170

回答者の属性	
雲南市民	5
保護者	9
市内 小学校教職員	96
市内 中学校教職員	43
高校教職員	2
大学関係者	8
県内 教育関係者	2
県外 教育関係者	3
その他	1
未記入	1
合計	170



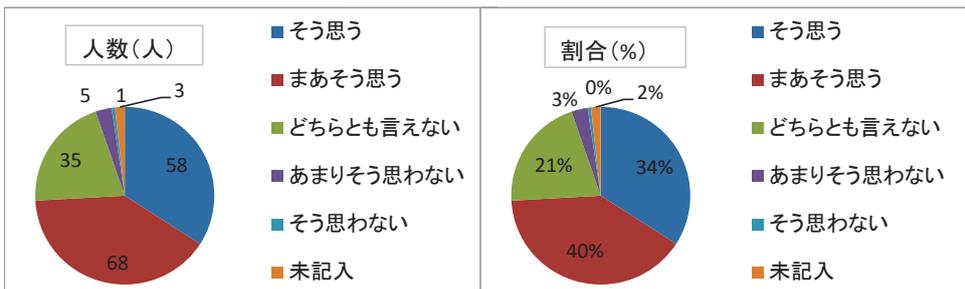
② 地域の中で、多様な主体(学校・地域住民・保護者・NPO・行政など)が連携、協働することができると思う。

回答	人数
そう思う	66
まあそう思う	80
どちらとも言えない	20
あまりそう思わない	3
そう思わない	0
未記入	1
総計	170



③ 高校での地域課題に関する学びを大学でより高めることができると思う。

回答	人数
そう思う	58
まあそう思う	68
どちらとも言えない	35
あまりそう思わない	5
そう思わない	1
未記入	3
総計	170



設問2. このイベントを通じ、心に残ったこと、キーワード、考えたことなど自由にお書きください。

雲南市民、保護者の方から

・高校生でも社会を変えられる。地域について考え、研究すると、大学進学についてより具体的に進路が決められる。
・高校生の時点で地域のことを考えることをやっていることに感動した。
・ファシリテーターの重要性。
・子供の将来の力。
・学生の発表がすばらしい。
・自主。

小学校教職員の方から

・自分が高校生や大学生の時にそこまで住んでいる地域の現状に関心がなかった。今の学生さん（一部だとは思いますが）には、これから長い時間ゆっくと確実に地域に貢献してほしい。自分にできることも少なからずあるはずなので、考え、実行していきたいという想いは芽生えた。
・失敗を恐れず継続していくこと。
・JA等の農業関係者、森林組織の材木関係者、商工業関係者、地域自主組織関係者等、地域産業を支える方の参加、発表を強く望む。
・（設問1.③で「2」を選択したことについて）大学では専門に特化するため、学生の希望をどれくらいかなえることができるのか、また、指導を受けることができるのか疑問がある。
・飯南高校生の取組は、高校生らしくて、シンプルであたたかみがあって、ステキな実践と思った。
・地域の子どもをどう育てていくか、将来に向けての学校の取組みについて考える機会となった。
・つながり。自分が育った地域、学びの場である地から自分の出身地を考えることはとても大切、すばらしいこと。そして自分にできることを考えること→実践化につなげること。
・高校生の柔軟な発想に驚いた。異校種・異学年の交流の場があり、地域に生きる・働くことがより現実的になると思う。
・高校と大学の地域課題に関する学習（活動）を関連づけたり、連携して進めたりすることができることよい。
・飯南高校の発表で他県から、多くの生徒が来ていることに驚いた。地域の魅力を高校生が伝えていくことで、これから、地域の活性化につながってほしいと感じた。
・ただなんとなく日々をすごしている学生にとって、日々の生活や想いを振り返り、それが進路や将来の目的につながっていくということに気づくことができるよい機会になったと思う。
・地域と自分。地域のために、それがそのまま自分のためになる関わりを作っていくことが、一番大切だと改めて感じた。
・大学生や高校生の学びの質のよさ、高さ。
・「行動力」がキーワードだと思いました。そのエネルギーとなるものはこのようなセミナーに参加して、様々な方とふれ合うことで得られる「熱」だと思いました。
・キャリア教育の大切さ。目的意識をもって取り組むことの大切さ。
・主体性。
・多様な学び。「正解を変える」。
・高校生の取り組みの発表がとてもよかったです。
・自分の地元好きなことが言える子どもたちを育てたい。
・高校生・大学生の参加があり、明日につながるシンポジウムだったと感じることができた。
・高校生や大学生の発表を通して、未来に希望を感じました。また、地域との連携をもう少し強めていきたいと考えました。
・それぞれの場で取り組みがなされていて、すばらしいと思いました。この取り組みをどのようにつなげ広げていくかが今後の課題だと感じました。
・「志を果たしに、いつの日にか帰らん」というフレーズが心に残りました。一度他県に出ることがあっても、そこで学んだことを地元へ持ち帰り、地域の活性化に貢献することの大切さを感じ、そういう子どもを育てなければいけないな…と実感しました。
・高校生の発表が立派でした。
・自分のことを語る。
・飯南高校のプレゼンがとてもよかった。すてきな高校生を見て自分も何かチャレンジしてみたいと思った。
・高校生、大学生の参加があって良い。
・高校生でも若者でも地域を元気にできる！
・これから人口減少、高齢化社会が加速度的に進んでいくこと。今ある職業の半分以上がなくなってしまうこと。高校生が地域のために貢献しようとする姿勢がよかった。
・高校の取組みを興味深く聞かせてもらいました。
・高い志を持った若い人材が育っていることを、本当に頼もしく、また、中年世代の私もがんばらねばという思いになりました。あと、都会から島根の高校に進学し、今日のような場で、自由な雰囲気を持って発表する姿に、深い感銘を受けました。
・高校生や大学生が地域にでかけ、良さをみつけることを積極的に行っています。どんなことをしているのか知れるいい機会になりました。若い人たちの作る未来の町が期待できます。
・初めて雲南市に来て働いている自分にとって、魅力のある市であると感じました。このような機会があることが素敵だと思いました。
・学生さんたちが、地域について真剣に考え、行動を起こしていることに感心しました。”チャレンジ” 大人にも大事なことだと思いました。
・県外から飯南高校への入学大変ありがたく思います。そしてプレゼンも上手でおどろきました。県内高校生も学ぶべき点があるのではないかと感じました。お互いの良いところを吸収しあえる場があれば刺激になると思います。
・島根県外に出ることや、色々な経験をすることで自信につながると思った。
・地域に貢献。
・「高校生でも社会を変えられる」。(2)
・「高校生でも社会を変えられる」力強く語り自分の言葉で伝えておられ、とてもすばらしかったと思います。
・主体性。
・高校生の時から、課題意識をもち、一步ふみだすこと、体験をして学びに生かすことができるんだと。地域のことを自分自身もつとめること。参加して、つながりをもつことが大事だなと感じた。
・仕事をつくりかへる、志を果たしに帰る、の言葉が心に残りました。これからの時代はまさにふるさとで、地域でいかんいきいていくか…が大切だと思いました。学校でも、こういう話ができれば…と思います。

・地域の高齢者を巻きこんだ活動
・もっと大学生や高校生がいるといい。こんな会こそ考える場として学生に開いてほしい。昨日のダイジェストが見られるとおもしろいと思う。学生の発表も良かった。
・地域の活性化。（でも実際雲南の方、特にお年が私（55）以上の先輩方のパワーはすごいです）
・地域貢献がしたいという強い意思。コミュニケーション能力。子どもを支えるバックアップ
・高校生、大学生が「地域」を大切に思い、「地域」で生きていこうとしていることが心に残った。
・高校生や大学生がすばらしい取組を行っておられることを知って、驚きました。
・高校生、大学生が地域に向けて発信している姿に感動した。たのしかった。もっともっと、まかせることが大切だと感じた。
・飯南高校の生徒の発表がとても上手で驚きました。自分たちで企画し、自信があるからこそ、あそこまで堂々と発表できると思いました。生徒の自主性を大切に活動の大切さを学びました。
・飯南高校の生徒さんが動画が出ないというアクシデントにもかかわらず、自分たちでつないで活かして、すばりしかった。こういう力が備わっていることが大切かと思う。
・高校生と大学生のワークショップにおいて、課題について、真剣に考えている若者の姿は素晴らしいと思うし、このような機会は、重要であると思う。
・キャリア教育の充実。関係機関の連携。
・高校生、大学生が地域に出かけ、課題を見つけ、解決していく姿は、とてもたのしいし、社会を変えていく力をもっていると思う。
・飯南高校生の発表に感銘を受けました。
・高校生や大学生さんが強い志をもって、学び・活動していることに大変おどろいた。熟議では、育てたい力を考え、色々な意見を学ぶことができた。

中学校教職員の方から

・自分の高校、大学時代のことは全く参考にならない。子供達の自立こそが、子供達の未来につながっていくと思う。
・地域でつながる。
・高校生の学び、特に飯南高校の発表で、高校生がつくるサマースクールがよかった。若者にまかせるところはまかせる町の姿もよい。
・飯南高校生の主体的な活動発表がすばらしくて驚きました。大学へ入る前に、地域との関わりまで考えていて、今の高校生・大学生は将来を担う力があると感じました。
・今回のような、活動の（話し合い）内容を広く伝え、実際の行動につなげていければと思います。特に高校生のように若い世代の思いを開けると、パワーとなると思います。
・地域の未来を考えること～自分なら何ができるか、行政なら何ができるか（未来像に向けて、具体的に行動すること、そういう人材をたくさん育てていくこと…）これらを、子どもたちの授業の中で育てていけたらと思う。
・変化を楽しむ。
・地域。
・”社会は変えられる”。
・人づくり＝地域づくり。キャリア教育、とても大事だと改めて感じた。
・貢献。よりよく生きる。
・高校生も社会を変えられる。
・持続可能な社会を築くための方策の答えは地域にある。
・高校生、大学生が地域のことを一生懸命考え、何とかよくしようと知恵を出し合っている姿に感心しました。これが思いつきだけでなく、少しずつ実現していくといいと思いました。
・殻を破ること！チャレンジ力。
・自分の言葉で自分たちが企画・行動した飯南高校の発表がとても印象深かったので、もっと広く、中学生、高校生にも聞いてほしいと思いました。
・地域と世界。
・高校生、大学生の発表を聞き、改めて地域の課題について見つめ直すことができ、非常に有意義だった。
・地域に出る。チャレンジの連鎖
・雲南市の取り組みがすばらしいと改めて感じる事ができました。
・つながる力。つなげる力。
・熟議で皆さんと話すことで多様な考えを知ることができ、有意義な学びの場となった。
・答えは地域にある。理想を話し合っ共有する時間が年に1回あっていいなど感じました。
・飯南高校のトラブルにすぐに対応できる力が立派だと思いました。県外出身者だそうですが、今後も活躍してほしいと思います。そして、島根県の良さを広く伝えてくれるとうれしいです。
・地域の中で活動し、貢献しようとしている高校生や大学生の姿が大変よかったです。教員もそのような意識や行動力を持ちたいと思いました。
・主体的に地域と関わり、地域を元気にしたいという高校生や大学生の姿勢に心をうたれました。

高校教職員の方から

・志を果たしに、ふるさとに帰る。

大学関係者から

・高校・大学卒業後の人材流出を最小限にするための行政側の方針等も知りたい。
・雲南市の長年の努力に敬意を表します。
・高校生と大学生のワークショップで、高校生の発想力、企画力、まとめる力、発表（プレゼン力）に触れることができ、思った以上に力があることが感じられた。

県外の教育関係者から

・教育はできると思うが、それが地域の発展につながるかは疑問。島大も7割は県外生だということだし、ということは高校生も県外に出ていると思う。教育を地域発展につなげるには、県の将来像、グランドデザインが必要だと思った。
・日本のこれからの課題を先取りしている気がする。がんばって欲しい。（本町も大いに参考としたい）

設問3. 地域に貢献する人材を育成するため、島根大学に期待することがありましたら、自由にお書きください。

雲南市民、保護者の方から

・このような活動をぜひ全国、世界にも発信して欲しいです。
・地域自主組織が行っているイベントへの参加（継続してほしい）
・COCの事初めて知りました。今後も継続していかれることを希望します。
・地域にどんどん入ってきてください。新しい風を入れてください。

小学校教職員の方から

・どんどん地域に（行事など）に派遣してほしい。
・小・中学校へボランティアで来ていただくといいかなと思います。
・医療、教育、どの分野でも、人格の形成が大切。人として、誠実さ温かさをもった人材をまず、大切に育ててほしい。
・学生の希望をかなえる大学の体制作り、丁寧な聞きとりをしてほしい。
・大学卒業後の進路（就職先）に結びつくような人材育成、就職先の開発、紹介
・本日のような機会をとおして、小・中・高の子どもたちに学生からよい刺激を与えてほしい。
・地域との連携を図ってほしい。（実情、展望等）
・自分の出身地のよさ（魅力）を再確認する機会を設けてもらいたい。学生・先生方等で議論してもらいたい→将来の生き方を考える場！
・地域貢献の取組を学内だけでなく、それぞれの地域へ返して（発信）もらおうとよい。教育学部の1000時間体験とCOC人材育成コースの活動が関連づけて行われるとよいと思う。（COC人材育成コースの学生）
・オープンキャンパス以外でも、島大の魅力を発信していく。（大学生を高校に派遣し、プレゼン）
・地域にも情報発信をしてほしい。一番目にするのは学校日よりです。飯南町在住ですが、小学校、中学校、高校よりは必ず目を通して見ます。
・COCに対して非常に興味を持っている子は多くいます。できるだけ多くの子に学びの場を開いてほしいと思います。
・大学の取組をさらにアピールするとよい。
・島根に残る人材育成。（惰性ではなく積極的に）
・島大生は本当によく雲南市に来てくれていると感じます。今後もそのような場が多くあり、雲南の子たちにナメの立場から良い影響を与えてくれることを期待しています。
・地域枠が多くあるのは、地域・地元希望です。（特に医師、看護師）ぜひ、つづけていってください。常勤医師不足は、島大の力で何とかしてほしいです！期待しています。
・今日のようなワークショップもいい。加えて、実体験を通して共有し、思考できるようなワークショップ活動。中・高・大のグルーピングで行うワークショップや活動。1回きりでなくて、年間を通して行うような企画。大学がつつなぎになって石見地域、出雲地域、隠岐地域の県内の広い地域の高校生、中学生が出会って交流できる企画。
・教育学部に所属していました。1000時間体験が大変有意義な取り組みだと思います。学校機関だけでなく、地域の行事・取組にどの学部でも参加できるようなカリキュラムや、大学からの地域（ふるさと）イベントの企画・運営の充実が図られていくといいと思います。
・様々な活動が学校であるのですが、気軽に見に来たり、参加して下さるといいな…と思います。ただ、（大学から）少し遠いのでなかなか来にくいのも課題だと思います。
・地元への就職を！！
・応援しています。
・1000時間体験は、大学生にとっても地域にとっても良いシステムだと思う。今後も続けてほしい。
・これからも、地域に出かけての課題解決的な学習を大切にしてほしい。
・島根の地域課題を解決するために何が必要かを研究し、それを学校に広げてもらいたい。大学入試で地域貢献枠の推薦があるとよい。
・地元出身の高校生を合格させるための枠を設けてほしい。
・地域の伝統行事に関わる体験をさせて頂ければと思います。地域の伝統行事を通じて、見えてくるものがたくさんあると思います。行事の担い手の問題、地域の歴史や生活文化、地域の人どうしのつながりなど、伝統行事を通じて、地方、特に山間地域にある社会問題が縮図として見えてくる中で、課題意識を持って行動できる人になってもらえればと思っています。
・大学でのとりくみの発信。
・COC人材育成コースの魅力を知ることができて良かった。
・地域にとどまる、あるいは定住する人材を育ててほしい。
・地域に帰り、山陰で働く、住むことを目的として、学生を募集し、学科をひらかれていることは興味深いです、地域にある大学として、良いと思った。活躍できる学生を育ててほしい。
・小・中学生にパワーを生み出せる学生を育ててほしい。私は文系ですが、地域の文化（音楽・芸能）を大切にしていってほしい。
・私は教育学部出身です。1000時間体験学修はぜひ続けていってほしいと思います。特に、様々な学校へ行くこと（大規模、小規模、異校種…）いろいろな経験をした学生さんは、社会に出てすぐ働ける、即戦力になると思います。
・育成した人材が実際に地域に残れる、地域で働けるような場づくり、ルートづくり
・学校の活動にどんどん入りこんで、ボランティア的な活動に積極的に取り組んでほしい。
・小学校、保育園等のボランティアを推進してほしい。3、4年生の最後（セメスター？）だけでなく自主的に行ってほしい。私自身学生の頃（県外でしたが…）ボランティアで小学校へ行かせてもらい、今とても役に立っている。
・地域貢献する人材を育成するために①地域を知る（出かけて）、②地域の人々に出会い、思いを把握する、③課題を考える、④解決するためにできることは何か考える ※大いに期待しています。
・地域に貢献する人材を育成するためには、大学の門戸を広くする必要がある。受験体制、大学の施設、教員数等の問題はありますが、ぜひ、定数の増加をお願いしたい。
・専門性を高めてほしい。第一人者の育成。（島大の〇〇先生、△△研究室を全国区に、世界レベルに）専門家、第一人者が多岐にわたり数が増えればなおよいと思う。
・ルールを守れる学生の育成をお願いします。
・島根大学でしかできない活動、都会では学べない、地域に密着した活動をしてほしい。そして、それぞれの市町村をさらに魅力のあるものにするために、活動をしてもらえたらと思う。
・活動、体験ありきの気がします。もう少し、現代の問題とか専門的な体系化された学問の追究が必要だと思います。ワークショップでの、高校生の発言とあまり変わらない、というところに危機を感じました。大学の生き残りのためかも知れませんが…。

中学校教職員の方から

<p>・COC、とても有効な制度だと思います。学生が、「県外が7割」と言われたことも驚きでしたが、今後も大学が「地域」に向いてPRしてもらいたいし、県外者が、島根に根づくことも有効であると思うので、島根（山陰）を活性化するための人材を育てている、という意識をもってほしいこと、地域の企業、産業と密に連携し、されていることをまた、地域に発信してほしいと思います。”研究”も大切にしながら。</p>
<p>・高校で地域とかかわる活動をたくさんしてきた生徒が、県外の大学に流れたり、あるいは島根大学に入れなかったりといったことがないようにしてほしい。大学の地域とかかわる活動も、文科省の「査定」に入ったりするようですが、地域の活性化につながる事業・教育を展開してほしい。一方で、古い考えかもしれないが、いわゆる偏差値的な、教育の質も維持向上させる努力もしてほしい。</p>
<p>・広い県内各地域ともっとつながる教育をしていただきたい。</p>
<p>・高校で学習したことが生かせるよう連携をしっかりとってほしい。学生を地域としっかりと結びつけ、これからの地域課題が解決できるよう、大学側も地域としっかりと連携してほしい。</p>
<p>・高校で養った力を伸ばしてほしい。</p>
<p>・大学の在り方が大きく変わりつつある中、島大においても時代に即した取組みが行われています。娘も貴校を卒業し、県内で教職に就いています。息子も貴校で学び教職をめざしつつあります。1000時間体験はいいことだと思います。島根の子が地元の大学で学びたいともっと思っていて欲しいです。</p>
<p>・地域に出掛けていかれる際に、短期間だけでなく、長期で関わっていかれるとよいのではないのでしょうか。</p>
<p>・COC人材育成コースの新設には期待しています。中学生にもその取組について紹介したいと考えています。</p>
<p>・地域にとけこめる人材育成。</p>
<p>・地域との積極的な交流。学生を地域に力強く押し出すこと。</p>
<p>・基礎研究に力を。</p>
<p>・今後も地域に密着した活動を継続してしてほしい。</p>
<p>・学生の時から一貫して、「地域」を意識した学びを積み重ねている現状に正直驚きました。机上の学習だけでは得ることのできない生きた学びを得ることができていると思いました。地域に残って貢献することも大切なことですが、一方で、住む所を限定せず、力を発揮する人材を育てることも必要なので、一方に偏らない人材育成を期待します。</p>
<p>・県外からの学生が多いということなので、県外出身者にもぜひ、島根に永住してもらえるように、サポートしてあげてほしいと思います。</p>
<p>・公共施設にたくさん出向いて、体験してほしい。</p>
<p>・地域で特に不足している医者や薬剤師の育成に力を入れて欲しいと思います。新しく学部をつくることは大変に難しいとは思いますが、地域の大学だからこそ、期待しているところです。また、医者の育成については、地域枠の学生には、是非、県内で活躍してもらいたいのので、何か少し条件をつけてもよいのではないかと思います。</p>
<p>・島根大学の学生さんには、カタリバや幸雲南塾で大変お世話になっていて、また、その真剣な姿に感銘を受けています。これからもこのような学生の活動の場や機会を増やしてほしいです。</p>
<p>・地域に積極的に関わる場を多くつくってほしい。</p>

高校教職員の方から

<p>・地域に貢献したい人材を育てるならば、地域とは全く関係のない所を見ないといけない。また、「問題」の解決を目的にしている所しか見えてこないため、どんな世界観を築きたいかを考えるべきだ。</p>
--

教育関係者から

<p>・教職員、学生など島大にかかわるすべての人（OB、OG、親などを含む）が、島大の価値を伝えてください。</p>
<p>・雲南など成功されている地域もよいですが、もっともっと苦しい現状のある地域でフィールドワークを学生さんと来ていただきたいです。</p>
<p>・地域のランドデザインを描ける人材を育ててください。</p>

設問4. その他、お気づきになった点、ご感想等お願いいたします。

保護者の方から

・昔、今の考え方の違い。”志を果たして””志を果たす”なるほど…と思いました。その志を持った人がたくさんになればこの活動はすばらしいものになっていくと思います。
・ずっと地域にいると見えなかったことも、外から見て、改めて言ってもらおうと再発見もあり、新しい地域づくり、そして子どもの育成の道すじが見えてくると思う。雲南の子どもは、シャイです。もっと、高校生・大学生の方々がもっともっと、積極的に入ってもらおうと、うれしいです。

小学校教職員の方から

・熟議1時間は長いか～…と思いました。
・将来の子どもの成長を願います。ありがとうございました。
・Bチーム（かもてらす）を聞いたが、もう少し簡潔に説明をすると時間短縮になったのではないかな。
・初めて参加しました。地域への思いを強く感じることができ、自分自身も子どもを教育する立場の1人として、がんばらなければならないと再確認させられました。
・熟議よかったです。
・12時までには終わっていただけると、ありがたいです。
・休日出勤については、ご一考いただきたい。時間延長についても。休日に休むのは、人としての権利である。
・トイレ休憩がほしいです。
・高校生がとてもしっかりしていて驚きました。飯南高校は県外からの入学も多いということで、島根を選んだ決め手などもう少し聞いてみたかったです。
・高校生、大学生のワークショップは、とても魅力的であると思った。ぜひ、雲南市の小中高校で、行いたいと思った。
・「地域に貢献する＝地域から出ない」ということではないと思う。他県に出ることで島根・雲南のよさや課題が見えてくると考えました。
・たくさんの意見や考えがあることがわかった。これからどう教育をみんなですていこうか意欲がわいてきた。
・いろいろなる方の発表や意見をきき、新たに意欲をもつことができた。
・今の考えに固執せず、変化を楽しむ。夢をもち、それに向かって努力することも大切だが、今、夢がなくても今すべきことを誠実にやり遂げた先に未来がある。私自身がそういう思いですごしていききたい、子どもたちに接していききたいと思いました。
・教職員用の資料は白黒でよいです。
・平日開催がいいと思います。
・COCの取り組みは、とてもよいことだと思った。
・昨年も思ったが、ここで出されたアイデアは、何に反映されているのかわからない。話をするだけで、そのために、休日なのに動員？同じ学校の者が同じグループ内にいる理由は？学校での取り組みを話し合っ決めてよいうことなのか？それは日々の職員会議でしていることで、様々な立場の意見を出し合うことが目的なら、グループ作りを考えた方がよいと思う。
・なりたい職をとおして地域に何ができるかは高校生には難しいテーマだと思うが、考える機会の1つになったと思う。ありがとうございました。
・グループ分けが中学校区毎で残念でした。幼小中連携でいつも話しているので、別の校区や地域・保護者と話をした方がよいと思いました。
・高校生、大学生の発表は、とても意欲的で、パワーを感じた。熟議は、テーマが少し難しかったが、グループの人と考えることができてよかった。
・高校生、大学生の発表がきけるのはとても楽しかったです。教職員としてだけでなく、親としても実りのあるイベントでした。ありがとうございました。

中学校教職員の方から

・島根大学との協働はとても先進的だと思います。画期的でした。
・資料に日程表を入れてほしい（大会の主旨）。雲南市の住民でありながら何が起きているか分からないままあまり説明のない大会の聴衆になるのはつらいものがあります。会全体の情報がなすぎずと思います。
・気軽に参加できる催し？も取り入れたら、参加者も増えるのではないのでしょうか。
・おもしろかったです！
・地域に貢献する人材、言葉で聞くといい響きなのですが、基礎にあるのは資金です。お金の話になるのは嫌いなのですが何かを始めるためには費用、予算…悲しいです。雲南市で生活するための安定した収入の保障、育児の保障、その他諸々の保障、老後の安定、保障、これは必須アイテムではないのでしょうか。
・わざわざ家庭の日になると、教員の負担が大きい。教員の家庭や休養はどう考えるのか。動員をかけるのであれば市教研という形で平日に開催すれば良いのではないかな。
・うんなん家庭の日で開催されるのであれば、もっと保護者や中学生が参加できるとよいと思います。
・飯南高校のプレゼンテーションがとても良かったです。参考になります。

高校教職員の方から

・誤字脱字が目立った。パソコンの操作スキルは、一通り全ての人ができるようにするのも、人材育成に欠かせないと思う。
--

大学関係者から

・雲南市だけでなく、県内の他地域へ広める必要がある。
・初めて参加したが、このようなイベントがあることを知って想像していた以上に充実した内容に思えた。

ともに未来を考える 地域でつながる私たちにできること

地域での活動を体験することによって、高校生や大学生は、どのような力を身につけていくのでしょうか。
シンポジウムでは、高校生と大学生が主体となり、地域での活動体験をもとに、グループワーク形式で対話します。
また、高校生と大学生の対話を踏まえて、これからの学力、学校間の接続、地域で育てたい人材について意見交換を行う予定です。高校生、大学生、一般の方を対象に開催します。ぜひ、ご参加ください。

開催日 the date

10.16 [日]

開場 8:30～
時間 9:00～12:35

会場 雲南市加茂文化ホール
ラメール (鳥根県雲南市加茂町宇治303)

参加費 無料

定員 600名 ※定員になり次第申込みを
締め切らせていただきます。

※申込みはFAXもしくはホームページより行ってください。
申込み締め切りは10月10日(月・祝)17:00までとなります。

プログラム program

第1部

●オープニング 9:00～9:20

・主催者あいさつ
・趣旨説明

●高校生と大学生による地域活動体験発表 9:20～10:05

発表者/大東高校生徒、飯南高校生徒、鳥根大学学生

【移動・休憩】

第2部

●高校生と大学生のワークショップ 10:15～11:55

高校生と大学生が地域での活動体験をもとにグループに分かれて意見交換します。

【移動・休憩】

第3部

●クローズセッション 12:05～12:35

ファシリテーター/岩本 悠太(鳥根大学地域教育魅力化センター)、今村 久美(NPOカタリバ)

当事業は「雲南市教育フェスタ2016」と共同で開催するものです。
詳しくは「雲南市教育委員会・教育総務課」ホームページをご覧ください。

主催:鳥根大学、雲南市、雲南市教育委員会 ■共催:一般社団法人国立大学協会 ■後援:鳥根県教育委員会

お申込み・お問い合わせ先 鳥根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター

TEL0852-32-6625 FAX0852-32-9726

[E-mail] admissioncenter@office.shimane-u.ac.jp [HP] http://www.shimane-u.ac.jp/

[お申込み専用HP] <http://www.leaf.shimane-u.ac.jp/enquote/no/zjvh4QUXJ>



ともに未来を考える
地域でつながる
私たちにできること

雲南市 教育フェスタ 2016

- 主催／雲南市 雲南市教育委員会
- 共催／雲南市PTA 連合会

平成28年度 大学改革 シンポジウム

- 主催／島根大学
- 共催／一般社団法人国立大学協会
- 後援／島根県教育委員会

平成28年 **10/16** (日)

雲南市加茂文化ホール「ラメール」

雲南市加茂保健福祉センター「かもてらす」

※スケジュールは予定です。主催者の都合で変更する場合があります。

■ [スケジュール]

9:00～ 9:20

ラメール大ホール

■ オープニング

ビデオ上映
主催者あいさつ



9:20～10:05

ラメール大ホール

■ 高校生と大学生による地域活動体験発表

◆発表者
大東高校生徒／飯南高校生徒／島根大学学生



参加者：地域住民のみなさん、PTA 保護者のみなさん、
教育関係者

10:10～10:50

ラメール大ホール

■ トークセッション

◆ パネリスト

小山 竜司氏 岩本 悠氏
(神奈川大学) (島根大学地域教育魅力化センター)

◆ ファシリテーター

今村 久美氏
(NPO カタリバ)

11:00～12:00

ラメール各会場 (裏面会場図参照)

■ 熟 議

参加者：高校生、大学生のみなさん

10:15～11:55

かもてらす (裏面会場図参照)

■ 高校生と大学生のワークショップ

◆ コーディネーター

美濃地 裕子
(島根大学アドミッションセンター)

◆ ファシリテーター

中野 洋平 (島根大学
高須 佳奈 (地域未来戦略センター))



12:05～12:35

ラメール大ホール

■ クローズセッション



雲南市長
速水 雄一



雲南市長あいさつ

雲南市は「人口の社会増」の取り組みの一つである「人材の育成・確保」に向け、子ども、若者、大人の3つのチャレンジの連鎖により課題解決先進地を目指しています。その中で、教育分野では、「子どもチャレンジ」が、次代を担う人材育成であるとともに、持続可能な雲南市を築くための人材育成につながっていくものとして捉え、保幼小中高の一貫教育とNPO法人と連携、協働したキャリア教育への取り組みを推進しています。

今年の教育フェスタが、島根大学との共同開催により今まで以上に地域の中で多様な主体が連携、協働するきっかけとなり、チャレンジの連鎖につながることを期待し、参加される皆様の熱き想いと高き志により、ここ雲南の地から全国に向けて発信できる実り多きものになることを祈念いたします。

[講師紹介]

小山 竜司 (神奈川大学 理事長付特別審議役、前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官)

平成元年文部省(現文部科学省)入省。生涯学習局(現生涯学習政策局)、福島県教育委員会を経て、高等教育局では大学改革を幅広く担当。また、平成18年カリフォルニア大学バークレー校客員研究員。帰国後、文化庁美術学芸課長、私学部私学助成課長等を歴任。平成26年7月から平成27年1月まで内閣官房へ出向し、「まち・ひと・しごと創生本部」事務局参事官。地方創生の「総合戦略」策定に携わる。平成27年4月より、文部科学省からの交流人事として現職。

岩本 悠 (島根大学地域教育魅力化センター 地域教育アドバイザー、島根県教育庁 教育魅力化特命官)

東京生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20か国の地域開発の現場を巡り、『流学日記』を出版。その印税等でアフガニスタンに学校を建設する。大学卒業後は、ソニーで人材育成・組織開発に従事する傍ら、全国の学校や大学でキャリア教育に取り組む。平成18年から隠岐島前に移住し、地域との協働による高校の魅力化に従事。27年から島根県の教育魅力化に携わる。共著『未来を変えた島の学校—隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』(岩波書店)。

今村 久美 (認定特定非営利活動法人カタリバ 代表理事)

2001年に任意団体NPOカタリバを設立し、全国約1000の高校、約180,000人の高校生に「カタリ場」を提供してきた。2011年度に東日本大震災を受け、被災地域の放課後学校放課後学校「コラスクール」を発案。2011年7月に1校目の「女川向学館」を宮城県女川町で開校。同12月には、2校目の「大槌臨学舎」を岩手県大槌町で開校。被災地の子どもに対する継続的な支援を行っている。現在、中央教育審議会教育課程企画部会委員。

[地域活動取組紹介]

島根県立大東高校

発表者

福間 千紘 (2年)
楠 胡桃 (2年)
川本 晃子 (2年)

今年度、大東高校の「地域課題研究」では、2年生全員が24グループに分かれ、大東町・加茂町内の9つの地域自主組織の協力のもと、地域の課題を発見し、解決策を探る活動を行いました。夏休みには地域で様々なアクションが起こりました。地元のぶどうを使ったスイーツを考案し地元菓子店で販売した班、子育てイベントを企画運営した班、高齢者のお宅の掃除を手伝った班などなど。本日は、佐世地区で防災をテーマに取り組んだグループが発表します。

島根県立飯南高校

発表者

村重 彩香 (3年)
須藤 孝太 (2年)
武田 遼平 (2年)
熊代 剛琉 (1年)

飯南高校のキャリア教育目標は「自らの人生を主体的に切り拓く力を身につける!」。本日の発表は飯南型キャリア教育「生命地域学」から生まれた校内クラブ活動「生命地域ラボ」の取り組み「森の学校サマーツアー」。県外の中学生に飯南町・飯南高校の良さを体験してもらうために、3泊4日のツアーを生徒が一から企画。8名の生徒がアイデアを出し合い、企画会議を繰り返して、地域住民と共に創り上げたツアー。本日はツアーの内容・苦労した点・感想や想いを発表します。

島根大学

発表者

土江 あやか (教育学部1年)
藤井 春菜 (生物資源科学部4年)

「COC人材育成コース」1期生の1年生と、各学部での学びと研究を深めた2年生以上の学生がシンポジウムに参加しています。いずれも、山陰の文化・伝統、政策、地域課題への関心をもち、積極的に地域で活動を行っている学生です。土江さんは、「COC人材育成コース」での学びを通して考えたことについて、藤井さんは、木質バイオマスの活用など、地域資源を活かした地域づくりについて発表します。



島根大学長
服部 泰直



島根大学長あいさつ

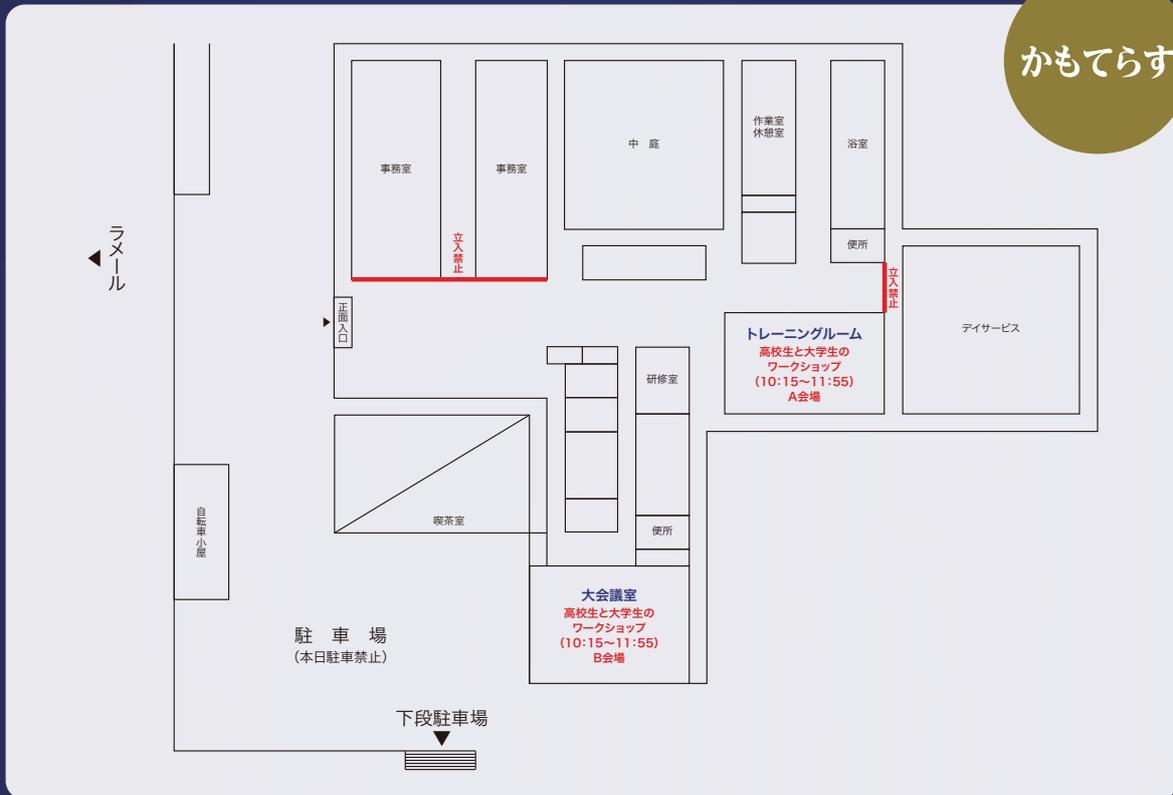
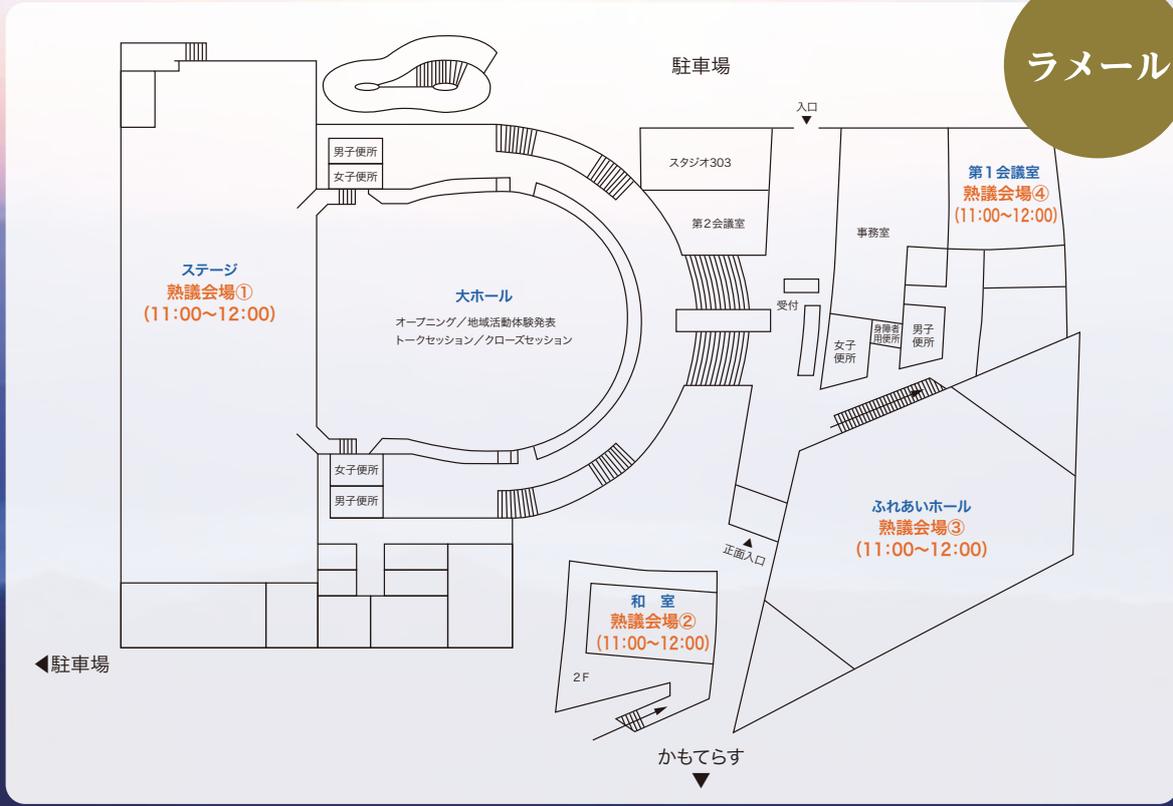
少子高齢化が進む島根県では、地域コミュニティの支えが大きな課題であり、本学では地域貢献人材の育成を重点課題として取り組んでいます。この状況を踏まえて、高校生と大学生が地域での活動について発表し対話することを軸にしたシンポジウムを「雲南市教育フェスタ2016」と協同で開催する運びとなりました。

本学では、昨年度から全学部に「地域貢献人材育成入試」を導入し、また、今年度から学部横断的な「COC人材

育成コース」を設置するなど、地域に関する実践的学びを強化しています。本シンポジウムでは、このコースの学生を含む本学学生と県内の高校生が対話を通して、地域課題への関心や学びの意欲を高め、さらに、皆様との活発な意見交換により、地域の皆様と意識の共有等をさせて頂ければ幸いです。本シンポジウムが実り多いことを祈念しまして、挨拶の言葉と致します。

フェスタ
国立大学2016

[熟議&高校生と大学生のワークショップ 会場案内図]



地域課題 学生ら成果発表

雲南で教育フェスタ 防災意識など

「教育フェスタ2016」と「平成28年度大学改革シンポジウム」が、雲南市加茂町の市加茂文化ホールラメールで開催され、大東、飯南の両高校の生徒と島根大学の学生が、地域課題への取り組みを発表した。

教育フェスタは今年で25年目。保育所から高校まで一貫した教育を進める雲南市と、同市と連携協定を結ぶ島根大などが開催した。全国各地の教育関係者や地

域住民ら約650人が参加した。

大東高の生徒3人は、地域課題の解決に取り組むフィールドワークの授業「地域課題研究」の成果を報告した。同市大東町の佐世地区の防災意識が低いことを課題に挙げ、解決手法として非常持ち出し袋のリストを配布し、防災意識を高める講演会を開いたことを説

明。「地域の方に普段忘れがちな防災に目を向けることを促す講演会が、防災意識の向上に有効だった」と検証結果を報告した。

発表を聞いた岐阜県立可児高の浦崎太郎・改革推進部長は「管轄の異なる県立の高校と市が連携し、組織的に地域教育に取り組んでいる点が先進的。生徒らの当事者意識がしつ

かりと育まれていると伝わってきた」と感心していた。

本シンポジウムにご協力いただいた方

【講師】

認定特定非営利活動法人カタリバ 今村 久美 代表理事
神奈川大学 小山 竜司 理事長付特別審議役
(前まち・ひと・しごと創生本部事務局参事官)
島根大学地域教育魅力化センター 岩本 悠 地域教育アドバイザー
(島根県教育庁教育魅力化特命官)

【来賓】

一般社団法人国立大学協会 山本 健慈 専務理事
厚生労働省労働基準局労働条件政策課 水畑 順作 労働条件確保対策室長
文部科学省高等教育局大学振興課 荒木 秀治 大学入試室室長補佐
文部科学省高等教育局大学振興課 塩屋 仁史 大学入試室入試第一係長
島根県教育庁 片寄 進 教育監

【共催】

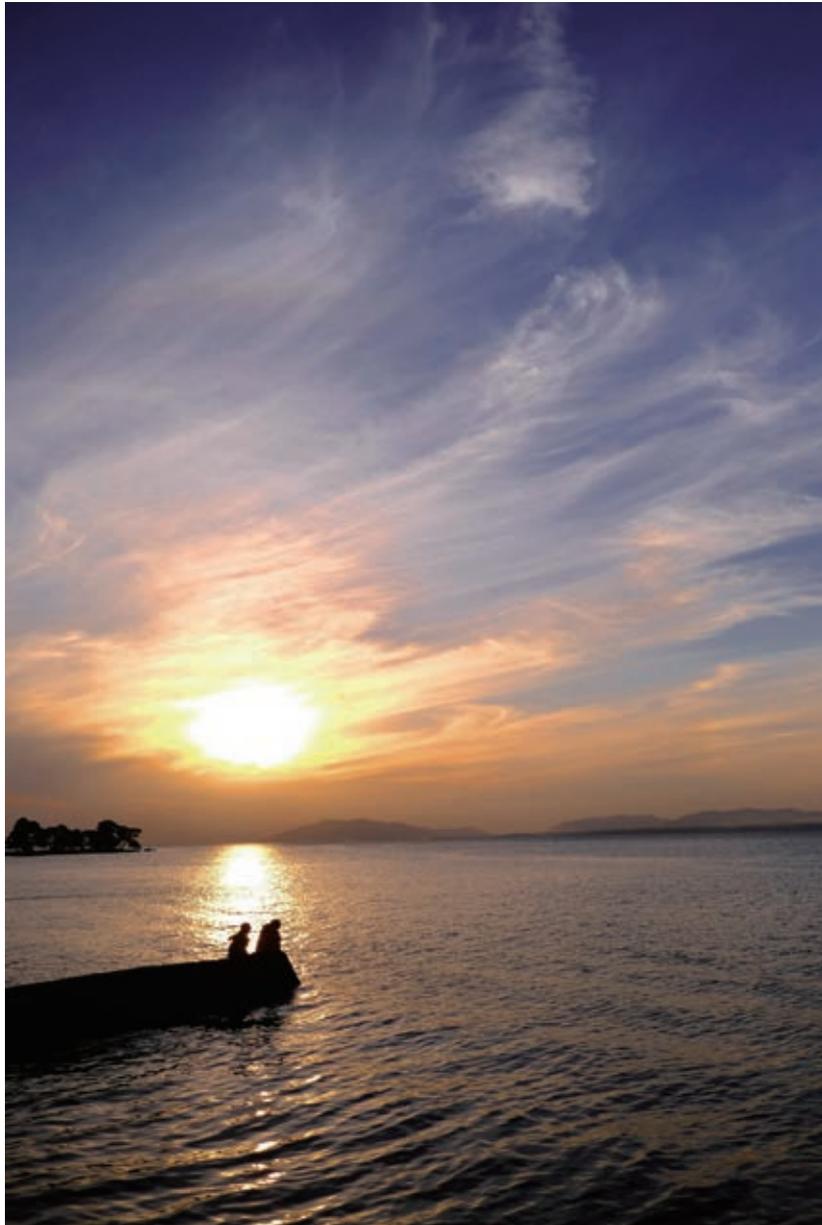
雲南市 速水 雄一 市長 (雲南市教育フェスタ 2016 主催者代表)
雲南市 藤井 勤 副市長
雲南市教育委員会 太田多美子 教育委員長
雲南市教育委員会 土江 博昭 教育長
雲南市議会 藤原 信宏 議長
雲南市議会 山崎 正幸 教育民生常任委員会委員長
雲南市教育委員会の皆さま

【取材協力】

雲南夢ネット

(敬称略)

宍道湖の夕日（島根県松江市）



撮影：荒木 秀治 氏（文部科学省高等教育局 大学振興課 大学入試室 室長補佐）

国立大学法人 島根大学 教育・学生支援機構 アドミッションセンター 編



人とともに 地域とともに
国立大学法人

島根大学

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

TEL:0852-32-6625 FAX:0852-32-9726

URL:<http://nyucen.shimane-u.ac.jp>